

徳島の建築家が考える 木造建築

—— 非住宅編 ——

Non-residential timber architectures
by Tokushima Architects

徳島の建築家が考える木造建築

—— 非住宅編 ——

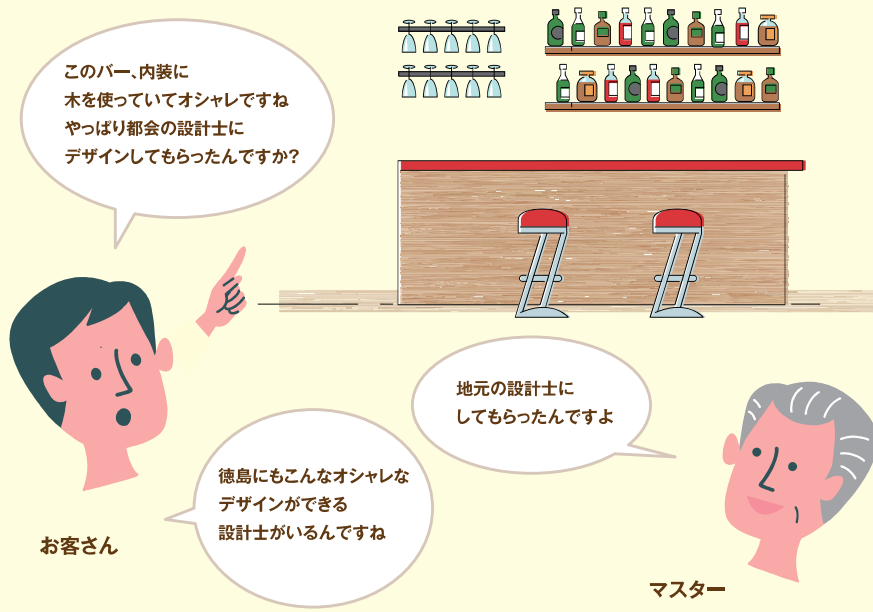
Non-residential timber architectures
by Tokushima Architects

発行 / 徳島県木材協同組合連合会
企画・編集 / 公益財団法人 日本建築家協会 四国支部 徳島地域会



木造建築のご提案

とあるバーでの会話



オシャレなお店は都会の設計士がデザインしていると思う方がいらっしゃるかもしれませんが、実は皆さんが知っているオシャレなお店にも徳島の「建築家」がデザインしたものがたくさんあります。

建築家にとって、住宅の場合は施主がお客様であり利用者です。一方で店舗などの非住宅の場合、利用者は施主にとってのお客様になります。だから施主の向こう側のお客様を見据えながら、気持ちよく利用しやすい空間をデザインしなければなりません。非住宅では、建築家の果たす役割がより大きくなります。そこで本冊子では、店舗をはじめとする住宅以外の民間施設の中から、徳島の建築家がデザインしたものをまとめました。事例として写真や図面に加え、建築家の設計思想も詳しく解説しております。

オシャレな店舗で集客アップにつなげたいショップオーナー様、従業員の福利厚生を充実させるために休憩室を設置したい経営者の方など、
地元の建築家にデザインを依頼してみませんか？
木造建築の美しさと機能性に、きっと満足するはずです。

目次

徳島の建築家が考える木造建築(非住宅編)

Non-residential timber architectures by Tokushima Architects

| | | |
|------------------|----------------|----|
| JIA 四国支部と木造建築 | 内野 輝明 | 1 |
| 木造建築のご提案 | | 2 |
| [店舗] | | |
| ろうそく夜 | 伊月 善彦 | 4 |
| Bar 余白 | 清水 裕且 | 8 |
| 阿波割烹 五十鈴 | 中川 俊博 | 12 |
| 檜野倶楽部 風雅庭 | 鳥羽 知夫 | 16 |
| オウ・ボワヴル | 新居 照和 & ヴァサンティ | 20 |
| Owner's Voice | | 24 |
| 木造建築のこれから | 清水 裕且 | 25 |
| 徳島県の森林・林業の歩み | 網田 克明 | 26 |
| 木で囲まれた空間の快適性 | 網田 克明 | 27 |
| [施設] | | |
| 晴耕・雨読 | 喜多 順三 | 28 |
| (株)日新四国工場 社員休憩所 | 島津 臣志 | 32 |
| マツシマ林工株式会社 木造倉庫 | 真鍋 志資 | 36 |
| 徳島ヴォルティス クラブハウス | 内野 輝明 | 40 |
| 東林院プロジェクト Ver.1 | 松田 公彦 | 44 |
| 木材を通じて山の価値を伝えていく | | 48 |



全景

| | | | | | |
|-------|--------|------|-----------|-------|-------------------|
| 敷地面積 | お寺境内 | 地域地区 | — | 内部仕上げ | コンクリート土間(床) |
| 延床面積 | 23.40㎡ | 主体構造 | 木造 | | 杉無垢材(壁) |
| 規模 | 木造平屋 | 基礎 | 石場建て | | 既存小屋組表し(天井) |
| 最高の高さ | 3.65m | 屋根 | 銅板平葺き | 設計期間 | 2015年11月~2015年12月 |
| 軒高 | 3.2m | 外壁 | 杉無垢材 | 工事期間 | 2016年1月~2016年3月 |
| | | 建具 | 木製サッシ(ヒバ) | | |

Architect



伊月 善彦 Itzuki Yoshihiko
 一級建築士事務所 株式会社 moon at.
 徳島県徳島市川内町小松東75-15
 ・TEL 088-677-3001

プロフィール

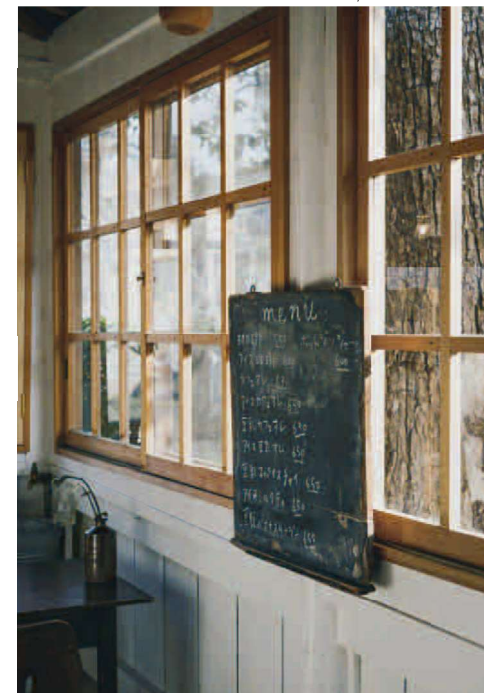
1985年 大阪デザイナー専門学校 建築デザイン科卒業
 1989年 伊月善彦アトリエ設立
 2007年 株式会社moon at.に改組

受賞歴

- ・トステム 第20回全国フロント施工例コンテスト全賞
- ・公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター主催「第26回住まいのリフォームコンクール」優秀賞
- ・トヨーキッチン 第10回「キッチンに住む」コンテスト審査員賞
- ・NPO法人 家づくりの会主催「家づくり大賞」再生部門賞
- ・第1回JIA全国建築賞 優秀賞
- ・日本空間デザイン賞2020入選 Long List (TOMOE本店)



玄関より見通し



木製建具はヒバ

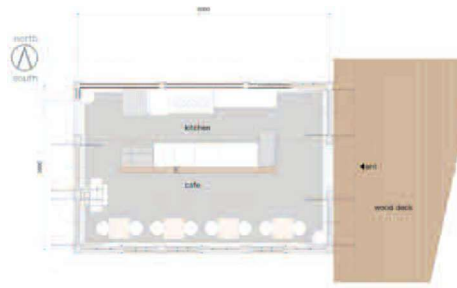


着工前の東屋



本堂との位置関係

→ 平面図



おそらく日本で最もミニマムなお寺カフェではないだろうか？ (moon at.調べ)
 事の起こりは、鳴門市大麻町大谷にある東林院(種蒔大師)というお寺の副住職からの電話だった。お話を聞くと、東林院境内に休憩場所としての東屋があり、そこをご近所さんや参拝者が気軽に休めるカフェ(雰囲気的には茶屋っぽい)が確かにカフェとおっしゃった)にリノベーションしたいということだった。そして、お店を運営するのは以前から自宅でリビングを開放して「ろうそく夜(よ)」という人気の自宅カフェを営んでいたトモちゃんである。彼女がこれまで培ってきたコンテンツをお寺に持ち込み、新しい形としてお寺カフェを展開するのだ。トモちゃんというソフトと、ハードとしての苔むした東屋をどういう風に味付けるか？で悩むこととなる。ろうそく夜が佇むシチュエーションは、お寺という長い時間の中で育まれた「場所」そのものである。なので「今ある風景をできるだけ変えずに計画しよう」というところからスタートした。石場建ての基礎と構造体はありのまま生かし、経年の地盤不陸もそのまま…。窓をつけた窓台も地盤による傾きなりに調整して取り付けるといった、風情とすれば「三匹の子豚」の2番目の子豚の建てた木の枝の家の家のような感じ？ それでも環境全体が持つ見えないうちに守られているように安定し、静かに風景に溶け込む茶屋(カフェ)になったと思う。



開店準備中



木漏れ日がさす店内



内部は杉無垢材をペイント



安心してさらに美味しいランチ



店主のモちゃん



地産地消の食材にこだわる



羽釜で炊くゴハン



喫茶店ろうそく夜

木造建築への思い — 伊月 善彦 —

日本人であるならば誰も「木」に対する愛着をDNAレベルで持っていると思う。住宅など一般的な規模、予算であれば木構造を選択するのも建築家の職能意識として当たり前にある。しかし、経済性や様々な要因から選ばれる木構造と「木」に対する想い、必然性から創られる木造建築はリンクしながらも似て非なるものだろう。先日、阿南市の若者が飛び込みで私の事務所を訪ねてくれた。彼は大学で建築の勉強をしたのち実家の建材店を手伝いその後考えるところがあって山師(山林伐採の)として独立したばかりだという。その道に入ってから気づいたり、知らなかったことも数多くあったらしく、これからの自分の人生において少しの希望と多くの絶望を感じていると言っていた。山の中で自然と共に働く気持ちよさや先人の財産を社会に活かせる喜び、一方業界で常に課題とされる木の川上から川下への流通の問題や労働に対する賃金対価のバランスが取れていないこと等々…「様々の事柄を良い方向に導く方法はないでしょうか?」という悩み相談も含めたくさんの話をした。彼と話をしている中で私自身考えさせられることが多々あった。昨今地産地消という考え方はとても重要なこととされている。地元の素材に対する愛着や、運送距離を総じてCO₂の排出を抑えること、カーボンニュートラルによる地球環境負担の軽減への期待など。そういったことは当たり前で知っていただけのことだけど、それ以上に地元で働く人たちの人生にも関わることをのどなぞということを感じた。どこかで木は木ではないか、と思うところが無きにも非ずではあったが表題の「木造建築への思い」というのは、地産地消をもって阿波っ子の心意気を示すことではないだろうか?と初対面の若者との出会いの中で強く思った今日この頃です。



風通しは抜群

Bar 余白

徳島県徳島市寺島本町

設計・監理
環境デザインワークス

施工
長田工務店

主要用途
バー



カウンター上部の木組みが陰影を生み出す

| | | | | | |
|-------|--------|------|------|-------|-----------------|
| 敷地面積 | — | 地域地区 | — | 内部仕上げ | ジョリパット |
| 延床面積 | 99.35㎡ | 主体構造 | — | 設計期間 | 2018年6月~2018年8月 |
| 規模 | — | 基礎 | — | 工事期間 | 2018年8月~2019年8月 |
| 最高の高さ | — | 屋根 | — | | |
| 軒高 | — | 外壁 | — | | |
| | | 建具 | 木製建具 | | |

Architect



清水 裕且 Shimizu Hiroaki

環境デザインワークス

徳島県徳島市助任橋1-24-11 WITHビル3F

TEL 088-624-8373

FAX 088-624-8374

MAIL e_design_works@clear.ocn.ne.jp

プロフィール

2001年

東京理科大学理工学部
土木工学科 卒業

地元建設会社に勤務しながら
独学で建築の世界へ

2009年

環境デザインワークス設立

受賞歴

・第23回木材活用コンクール優秀賞
(一社)日本インテリアプランナー協会賞 (Bar 余白)

・日本空間デザイン賞2020
Short List (Bar 余白)

・第4回JIA四国建築賞 大賞
(小さな石場建ての家)

■所属 / 日本建築家協会 日本建築学会 徳島県建築士事務所協会 徳島県建築士会

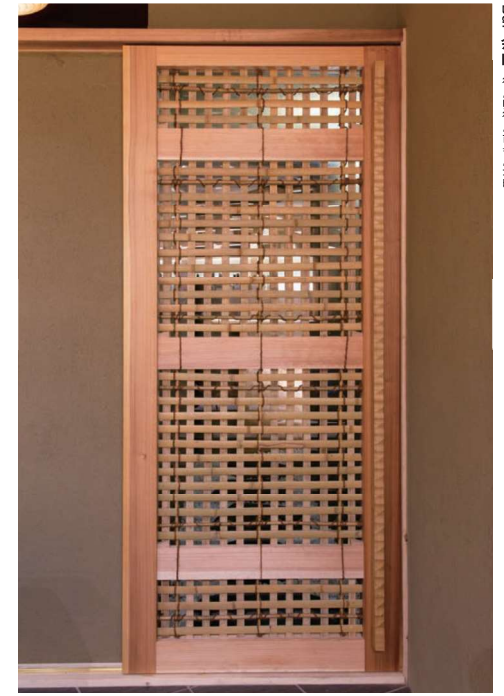
— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —



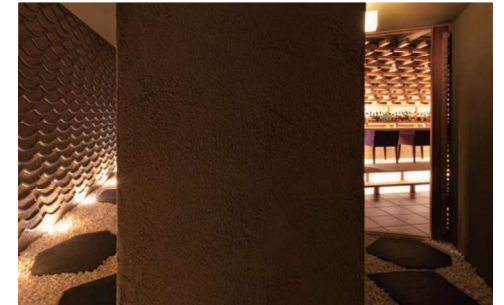
カウンター下にも陰影でデスクチャを与える



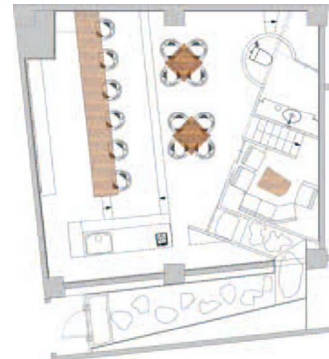
空間の広がりを感じる瞬間



竹小舞建具



アプローチ折返し



平面図

日本の空間であることがクライアントからの要望であった。扉を開けてすぐに店内へ入るのではなく、茶室へ向かう露地に見立てたアプローチ空間を作り、時間的な間合い(余白)を持てるようにした。このアプローチ空間は幅も高さも店内に向かうほど小さくし、身体的・視覚的にバースを効かせながら空間を絞った。そうすることによって、茶室の開口(にじりぐち)のように、店内(天井高が高く平面的に斜め方向に広げた)へ入った時には実際以上の空間の広がりを感じるであろう。また、店内入口の引き戸は土壁下地の竹木舞でデザインし、アプローチからカウンター背面上部の木組が竹木舞から「見え隠れ」するようにし、建具を開けると一気に目に飛び込んでくるよう意図した。カルチェラサータというイタリア磨き仕上げで表情をつけた円筒状の空間はトイレへのアプローチ演出として、吸い込まれるような奥性を生み、直線と曲線の「二元対比」を強調した。材料は木、土、石などの自然素材を用いた。カウンター背面上部の木組やカウンターの一枚板、床材には杉材を用いた。アプローチ空間には瓦土壇や、金屏風に見立てた壁がある。何も描かない日本の金屏風に見立てた真鍮壁は「余白」を、そして経年変化で色がくすんでくることで「侘び・寂び」を表現した。このように「余白」「見立て」「奥性」「二元対比」「侘び・寂び」など、日本文化の根幹を感じられるような空間を目指した。

Bar 余白

徳島県徳島市寺島本町

Photo / 米津 光



奥に広がる平面計画



中二階からみる



トイレ空間

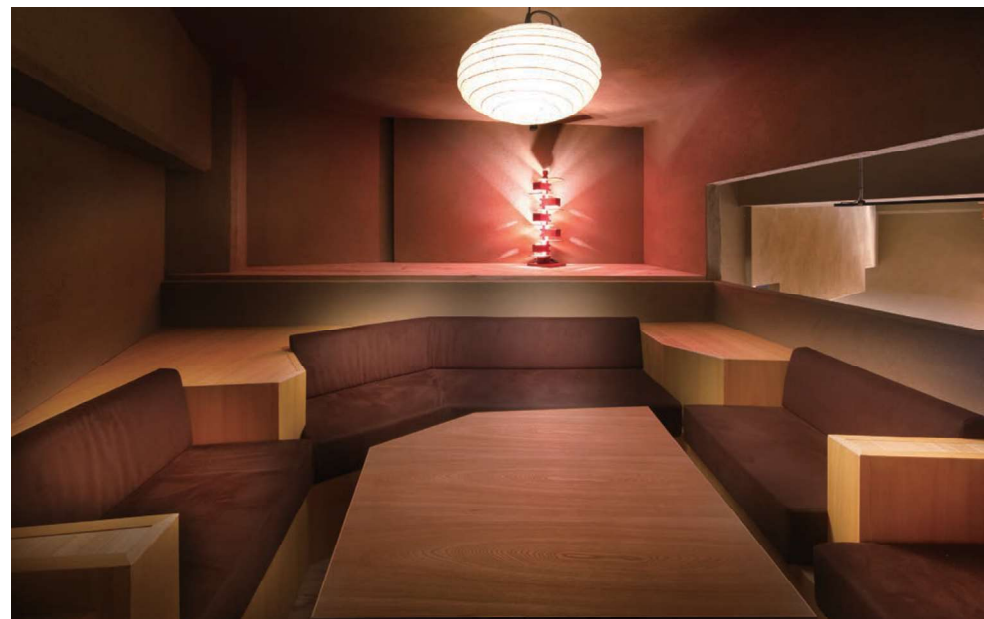
木造建築への思い — 清水 裕且 —

今回の「Bar 余白」もそうですが私の場合、店舗設計のほとんどが既存建物のインテリアデザインであり、建築からつくるといことは滅多にありません。なので「木造建築」というより「木のインテリア」への思いを述べます。木をインテリアに使う理由として大きく5つに分けてみました。まずは「触り」です。手触り、足触りがいいということです。なぜいいかの説明はここでは省きますが、感覚的にわかっていただけるのではないのでしょうか？

あと、目触りとして木には自然のテクスチャー（表情）があります。木目など何一つ同じものはありませんし、光の反射も目に優しいです。2つめは「香り」です。香り成分には癒し効果や抗ウイルス効果などが認められています。3つめは「加工性」です。木は鉄やコンクリートなどと比較してフレキシブルに加工しやすいのでデザインの幅が広がります。4つめは「情緒性」です。木という素朴な材料には泥臭さみたいなものがあり、その中に人間の本質が潜んでいるように思います。また、無垢材では物理的な強度の問題もあり、適度に柱や壁が必要になってきます。そのことで自然とヒューマンスケールな空間が構築されます。5つめは「山とのつながり」です。木を使うことによって治山治水やカーボンニュートラルといった背後にある地球環境にも貢献しているというものです。以上のような事を考えながら木をデザインしています。



エントランス



中二階

阿波割烹 五十鈴

徳島県徳島市秋田町

いすず

設計・監理
(有)中川建築デザイン室

施工
(株)島出建築事務所

主要用途
料理店(割烹)



1期施設ファサード

| | | | | | |
|-------|---------------------------------------|-------|-----------------------------|-------|--|
| 敷地面積 | 419,05㎡ | 地域地区 | 商業地域、準防火地域 | 内部仕上げ | 和紙クロス貼り |
| 延床面積 | 1期 145,13㎡ 2期 105,38㎡ 合計250,51㎡ | 主体構造 | 木造在来工法 | 設計期間 | 1期 ー 2015年1月~2015年12月 2期 ー 2017年1月~2017年6月 |
| 規模 | 木造一部2階建 | 基礎 | RCベタ基礎 | 工事期間 | 1期 ー 2015年12月~2016年6月 2期 ー 2017年6月~2017年11月 |
| 最高の高さ | 7,25m | 屋根 | ガルバリウム鋼板瓦葺き | | |
| 軒高 | 6,3m | 外壁 | ショップフロント周リ、有機矽塗材発泡仕上げ(防火構造) | | |
| | | その他外壁 | ガルバリウム鋼板折板張り(防火構造) | | |
| | | 建具 | 延焼のおそれエリア外、内部、すべて県産杉木製建具 | | |

Architect



中川 俊博 Nakagawa Toshihiro

(有)中川建築デザイン室

徳島県徳島市国府町敷地311
・TEL 088-637-2311
・FAX 088-637-2312
・MAIL nak@fundo.ok1.jp

■所属 /
日本建築家協会
日本建築学会

プロフィール・実績

1977年 九州産業大学 芸術学部卒業
1987年 地元デザイン事務所から独立
1989年 プチリゾートホテル・モアナコースト(徳島/鳴門)
1991年 コートヴィレッジ桜ヶ丘(東京/多摩)
1993年 (有)中川建築デザイン室設立
1995-97年 しんまちボードウォーク(徳島)
1997年 こうべ甲南武庫の郷(神戸)

1998年 旧Tio高原ビル/現kokusaiビル(徳島)
1999年 しんまちアトリウムアーケード(徳島)
2001年 カフェ&レストラン カサブランカ(徳島)
2002年 ハウスウェディング ノビアノピオ(徳島)
2003年 複合商業施設 88ステージ(丸亀)
2004年 複合商業施設 West-West(大歩危)
2005年 那覇市西町再開発事業(沖縄)
2008年 徳島LEDアートフェスティバル提案、検討委員

2009年 徳島県青少年センター改修PFI事業(とくぎんトモビルプラザ)
2010年 アグリカフェモド(徳島)
2012年 七福タイル配送センター(今治)
2013年 阿波地業 ぁおき(勝浦町)
2017年 阿波割烹 五十鈴(秋田町)
2017年 れんまるカフェ(鳴門)
2019年 ルノ徳島ショールーム(石井)

受賞歴

・第8回 ジャパンショップ・記念コンペティション・ホテル部門入賞
プチリゾートホテル モアナコースト
・第6回 建設省緑のデザイン賞 建設大臣賞
しんまちボードウォーク両国橋公園
・日本商環境設計家協会JCDデザイン賞97
複合施設部門 入賞
こうべ甲南武庫の郷

・第7回 徳島市まちづくりデザイン賞 最優秀賞
・第13回 国土交通省 手づくり郷土賞 入選
・2003 国交省都市整備局 都市景観大賞
しんまちボードウォーク整備事業
・第8回 徳島市まちづくりデザイン賞 最優秀賞
Tio高原ビル
・2005 東京国際家具具本市アワード グランプリ受賞
組立式家具ZIGZAG他

・2013 徳島市まちづくりデザイン賞 緑とともに賞
徳島青少年センター改修事業(とくぎん とともにプラザ)
・2017 LIXILプロトコンテスト2017 小規模施設部門受賞
れんまるカフェ



1期 連結した客間



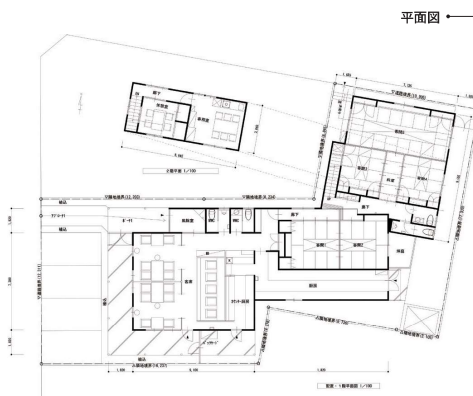
1期 ラウンジ客席張り全景



1期 エントランスステラス内



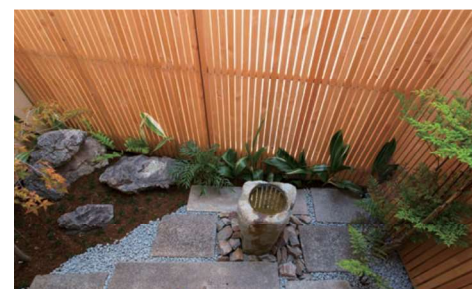
1期 カウンター席張り



平面図



1期 個室ラウンジ席全景



1期 坪庭

建築地は、昔からの徳島の繁華街秋田町の中心地にある。準防火地域の敷地は、鉄筋コンクリート造、鉄骨造の雑居ビルが建ち並ぶ環境だが、施設の用途を考えると、木造で建てるのが最適と考え、防火構造の木造平屋建てを提案した。隣地周りの目に付きにくい外壁は、ガルバリウム鋼板張りとし、ファサードなどの目に付きやすい外壁周りは防火構造の塗り壁仕上げとして、曇囲気確保できるような計画した。変形敷地のため、各個室はパーティションで分けて、様々な利用客に対応できるように間仕切られ、ウナギの寝床風にも奥へと繋がるようなレイアウトとしている。身の丈に合った小規模の運営でスタートしたが、運営の努力から人気店へと成長。増築が必要となり、2期工事として一部事務所を撤去し、奥に残る駐車場に2階建てを増築した。増築した各客席は個室として利用するが、大人数の宴会時には、建具を引き込み大広間として、TPOに合わせて使えるように計画している。増築部との取り合い廊下は、敷地形状の歪みがそのまま廊下に現れ、最初から計画した形にはない増築ならではの面白い雰囲気になっている。さらに人気が高まって手狭になれば、第3弾の増築も可能だと施主に提案をしている。

阿波割烹 五十鈴

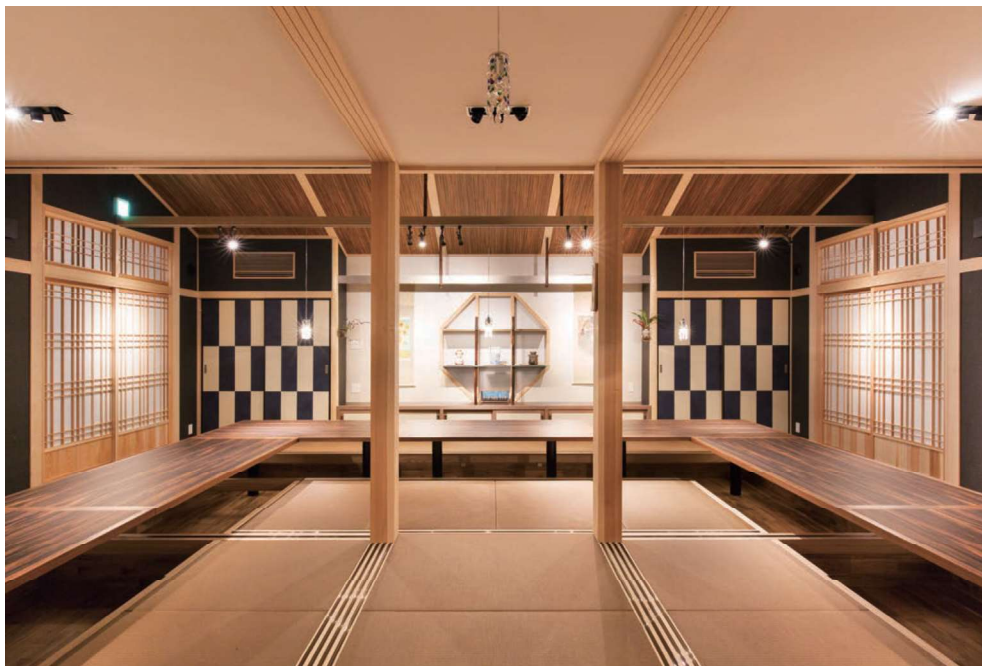
徳島県徳島市秋田町

いすゞ

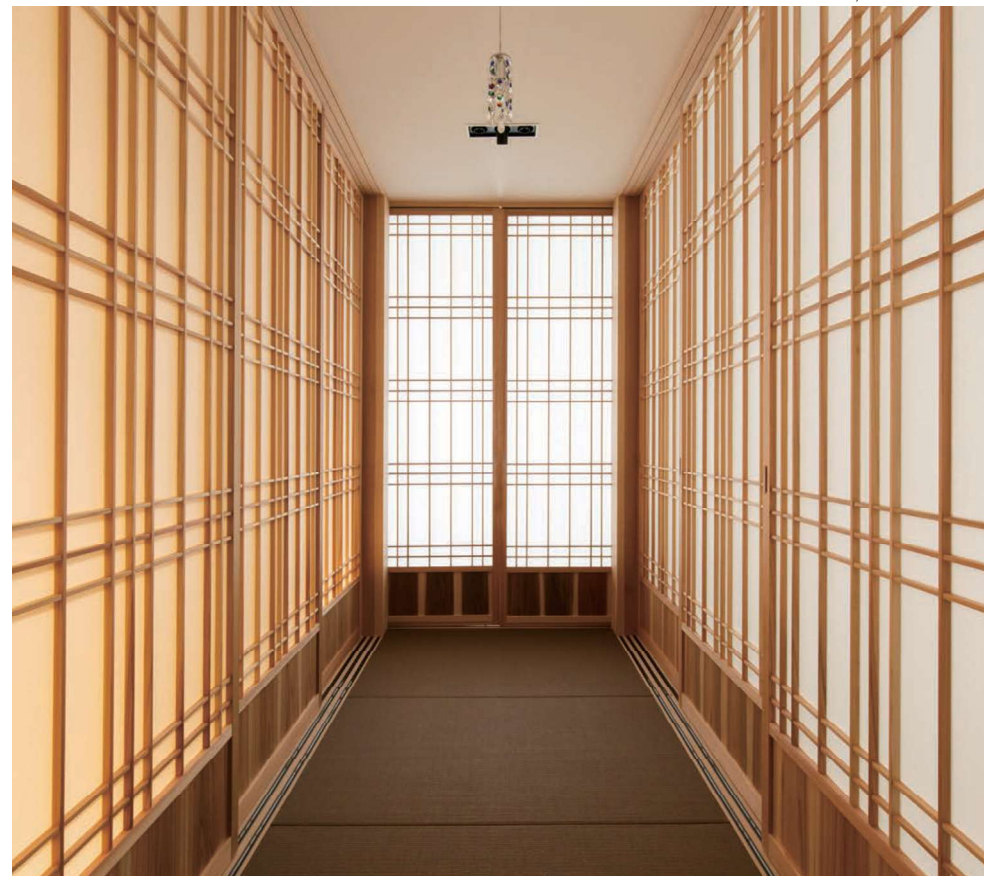
Photo / 米津 光

— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —

阿波割烹 五十鈴
徳島県徳島市秋田町



2期 増築部_連結大広間利用1



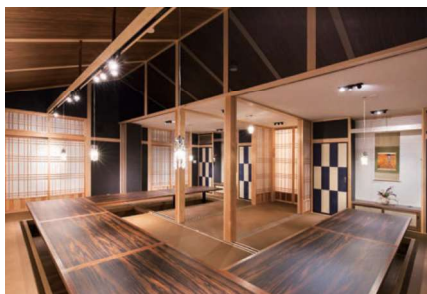
2期 増築部_1F中廊下



2期 増築部_小間



2期 増築部_広間



2期 増築部_連結大広間利用2

木造建築への思い — 中川 俊博 —

木造建築は、徳島の気候風土にも調和し、快適性もS造、RC造よりも住み心地は優しい。また、用途に合わせた増改築も容易であり、対応性の高い建物として利便性は高い。しかし、小規模な建物ではなく、中大規模の建物を木造でとなると、伝統工法や在来工法の枠を超え、集成材やCLT、LVLなどを使った新木造と呼ぶ部材や、工法が主流だ。徳島にはそのような工場は無く、いざ使うとなれば県外のメーカーや材料に頼らざるを得ない。県産材にこだわって使おうとすれば、どうしても重ね梁、合わせ柱といった特殊な工法や、効率の低い利用になってしまう。特殊な工法では県産材の利用できる機会は限られ、どうしても小規模施設中心の利用になるだろう。また、徳島のような地方でもグローバル経済の中にあり、目の前の県産材よりも、はるか遠くからコンテナに乗ってくる外材が、安くきれいで使い易かったりする現状がある。最新のCLTやLVLの工場とまで行かずとも、既に一般部材として多く利用されている集成材の工場が県内に共同でも1つあれば、単純な経済効率優先の価値観に対して、地元の施設を地元の材料で建てる地産地消として、環境問題やCO₂対策、地域経済の循環など、県産材の有効利用を介して可能性は大きく広がるのでは、と思う。



2期 増築部外観



既存-増築部_連結廊下

榎野倶楽部 風雅庭

徳島県板野郡松茂町

ふうがてい

設計・監理
株式会社 鳥羽知夫建築設計事務所

施工
株式会社 島出建築事務所

主要用途
結婚式場



南の庭から

| | | | |
|-------|-----------|------|----------------------|
| 敷地面積 | 11802.67㎡ | 地域地区 | 市街化調整区域(用途指定なし) |
| 延床面積 | 268.58㎡ | 主体構造 | 木造 |
| 規模 | — | 基礎 | 既存基礎改修 |
| 最高の高さ | 7.6m | 屋根 | ガルバリウム鋼板横葺+既存瓦 |
| 軒高 | 5.5m | 外壁 | 漆喰塗+既存仕上補修(土塗り壁+漆喰塗) |
| | | 建具 | 杉柵ガラス戸 |

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 内部仕上げ | 一部構造現し+新設天井(ビニルクロス) +既存仕上補修(漆喰塗) |
| 設計期間 | 2011年10月~2012年3月 |
| 工事期間 | 2012年4月~2012年6月 |

Architect



鳥羽 知夫 Toba Tomoo

株式会社
鳥羽知夫建築設計事務所
徳島県徳島市南新町1-25 天野ビル2F
-TEL 088-655-5799
-FAX 088-655-5796
-MAIL info@toba-architect.jp

プロフィール

1986年 徳島県立城南高校卒業
1990年 近畿大学工学部建築学科卒業
1991~93年 小川晋一都市建築設計事務所勤務(広島)
1993~2002年 中川建築デザイン事務所勤務(徳島)
2002年 鳥羽知夫建築設計事務所設立
2006年 株式会社 鳥羽知夫建築設計事務所にて改組

受賞歴

・インテリア関連と住まいコンペ&コンテスト2003入賞(2003年)
・第10回 徳島市街づくりデザイン賞「まちかどパーク賞」受賞(2004年)
・第5回徳島県まちづくり環境大賞「まちづくり造景部門 / 優秀賞」受賞(2004年)
・JCD DESIGN AWARD 2007入選(2007年)
・第15回 徳島市街づくりデザイン賞「路地中の優しさ賞」受賞(2018年)

■所属 / 日本建築家協会 徳島県建築士会



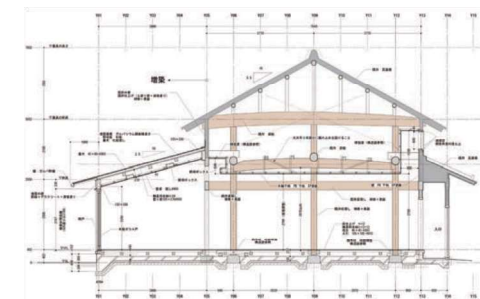
既存の様子(外)

既存の様子(内)



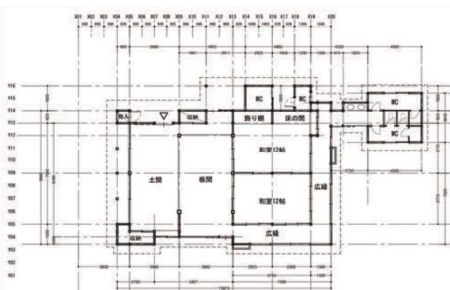
解体工事中

断面図

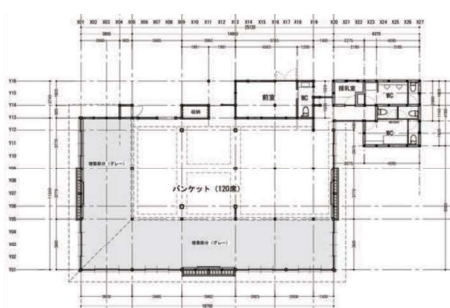


「下屋」を増築中

平面図(既存)



平面図(改装後)



「榎野倶楽部」プロジェクトの舞台となった、旧施設「阿波の里」は、1993年、徳島を代表する和菓子メーカー社長の「土着の味覚文化を提供する憩いの場をつくりたい」という想いのもと、近代的な生産システムを備えた工場と「里山の風景」を融合させた複合施設として誕生したと聞いています。この折りに、滋賀の古民家3棟が解体移築され、レストラン、茶屋、休憩所とそれぞれ新しい機能を与えられました。残念ながらオープン時の賑わいは、時の流れとともに隣りをみせ、2002年に閉鎖しました。

同じ年、プライダル事業を総合的に手がける老舗貸衣装会社から、この施設を「結婚式場」として改装したいとの依頼を受けました。しかし、「阿波の里」が機能を停止してからかなりの時間が経過しており、移築された古民家3棟は傷みが酷く、風情や趣きを感じられるような状態ではなかったことを記憶しています。改修作業以上に困難だったのは「法的整理」、つまり新たな用途に合わせ、建築許可を取り直すことでした。付帯設備の老朽化、広大な敷地全体で複合的に絡まる法基準…。当時、共に知恵を出し合い、協力していただいた行政の方々にはたいへん感謝しています。「榎野倶楽部 本館」は、様々な困難や課題を乗り越え、2004年にオープン。県下屈指の人気プライダルバンケットとして、活躍をはじめます。

「別邸 風雅庭」は、2期工事として2012年に竣工しました。江戸後期に創建された滋賀の武家屋敷(武田家)、「阿波の里」時代には茶屋として使われていた建物の増築でして、建物全体の耐震強度を増すことと合わせ、二方に下屋を増築することで「披露宴会場として最大120名収容」という条件をクリアしました。解体途中は貧相な姿となり、若干、不安な気持ちにもなりましたが、現代の職人の手により新たな部材と融合し、新しい役目を与えられ「蘇生」してくれたように感じます。工事中、永い時を経た木も、加工のためカナを入ると、真新しい木肌を見せてくれたことに感動しました。木は柔軟で強く、そして生き物であるということを強く感じさせてくれた改築でした。そして2014年には、敷地内第3のバンケット「観月邸 梨宮」も完成。3期にわたるリノベーションによって、複合施設としての「榎野倶楽部」が完成しました。

滋賀で暮らしていた当時の住人から見ると、今の使われ方は、どのように映っているでしょうか…。もちろんその時代の面影は全く、変わり果てた姿に複雑な思いを抱くかも知れませんが、少なくとも、幸その門出の場として使われていることは喜んでくれるのかな…と樂觀的に想像したりもします。「阿波の里」から「榎野倶楽部」へと、時の流れとともに名称も用途も変わりましたが、先人が残してくれた価値ある木造建築が、これらも多くの人と出会い、新たな歴史を刻んでいくことを切に願っています。

ふうがてい
檜野倶楽部 風雅庭

徳島県板野郡松茂町

Photo / 米津 光



内部より南の庭を望む

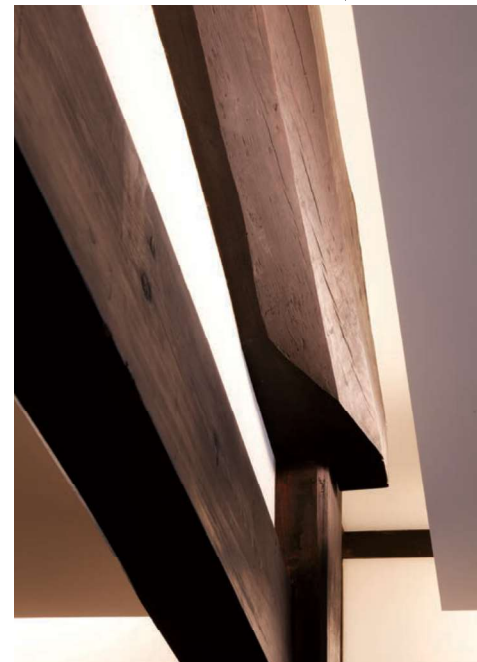


夜景

木造建築への思い — 鳥羽 知夫 —

2年前に「もっけんフォーラム」(主催:とくしま木造建築学校)のリレーセミナーで「設計監理を「木」をテーマに振り返る」という、少々大げさなタイトルで話をさせていただきました。学生時代から、就職、独立し現在に至るまで「木」との関わり、そして自分の仕事を振り返る意味でも貴重な機会でした。生い立ちから振り返ってみても、木の恩恵を受けるような内外の生活環境ではなかったのですが、唯一、週に1度遊びに行く母の実家が、小さな木造の平屋(17坪)でした。間取りは今でいう「店舗併用住宅」で、背広を仕立てる作業場からし型に繋がるように6畳が2間あり、その奥に水場(台所)、風呂はそこから外に出て積層ブロックで作られた小屋の中がありました。そんな時から25年が経ち、独立してすぐ仕事もない頃に、初めて依頼もらったのが、その母の実家の改装でした。工事内容は、かなり高齢となった祖父が過ごしやすいよう手すりを付れたり、段差を解消したりということでした。久しぶりに訪れ、ほんの少しだけ建築の知識がついた頭で改めて眺めてみると、驚くのはその「広さ」でした。記憶にある当時のことを思い出してみると、玄関から客が来ると、土間と作業場の段差が相手に座っていただくのちょうどいい高さで、お茶は「作業台」の上に出され商談していました。母が子供の頃は5人(夫婦+子供3人)で暮らしてたそうですが、夜はきっと作業台が子供の勉強机になっていたのでしょう。主な生活空間だった奥の6畳2間では、食事が終わると片付けて布団を敷き寝室に、奥の台所は食事のあと歯を磨く、といったように場を柔軟に兼用しながら使っていたことが想像されます。現在、周りの景色はガラッと変わってしまっており小さく感じますが、母の弟が住み継いでいます。家が人と同じように歳(時間)を積み重ね、ずっと寄り添ってくれている優しさを感じます。最近、間取りを考える時、この母の実家のことをよく思い出します。

— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —



内装制限により木部露出は1/10以下とする必要がある。
 新たな仕上げに「隙間」を設けられる限り既存の部材を見せるようにした



新旧部材の取り合いを素直に見せた仕上

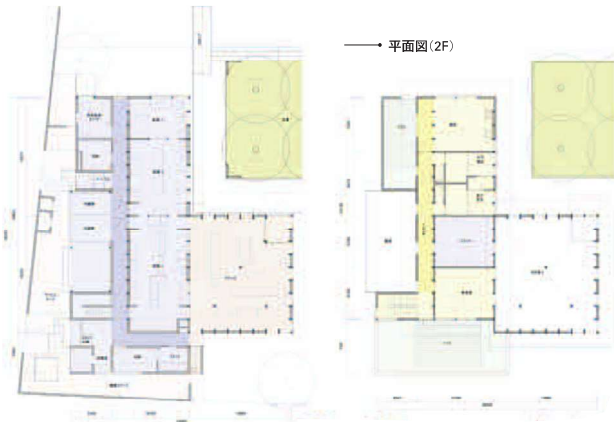


樹陰の下に広がる地域店舗空間



菓子作り文化を育む広場を長い梁で囲む。梁は伝統継手で繋ぐ

→ 平面図(1F)



→ 平面図(2F)

| | |
|-------|------------------------------------|
| 敷地面積 | 1946.12㎡ |
| 延床面積 | 463.91㎡ |
| 規模 | 地上2階 |
| 最高の高さ | 7.54m |
| 軒高 | 6.97m |
| 地域地区 | 第一種住居地域、第一種中高層住居専用地域 |
| 主体構造 | 木造軸組工法 |
| 基礎 | 鉄筋コンクリート造 |
| 屋根 | カラーガルバリウム鋼板立平葺き |
| 外壁 | モエンスाइディング、スタッコ吹付仕上げ |
| 建具 | 木製建具、アルミ製サッシ |
| 内部仕上げ | 床：ナラ床材、長尺塩ビシート 壁・天井：木造現し・ビニルクロス |
| 設計期間 | 2006年10月～2009年11月 |
| 工事期間 | 2009年11月～2010年06月 |

Architect



新居 照和&ヴァサンティ

Nii Terukazu & Vasanti

新居建築研究所

徳島県徳島市国府町中246-4

・TEL 088-642-7257

・HP <http://nii-architects.com>

新居照和 / プロフィール

- 1979年 関西大学大学院建築学修士
- 1979年 インド留学、B.V.D.-ン研究所
- 1986年 CEPT大学院美術科修士
- 1987年 末吉栄三計画研究室
- 1991年 新居建築研究所設立

受賞歴

- ・2012年日本建築学会作品選集
- ・2012年日本建築家協会環境建築賞
- ・2013年徳島県木造住宅推進協議会長賞

ヴァサンティ メノン 新居 / プロフィール

- 1980年 ムンバイ大学建築学卒業
- 1980年 B.V.D.-ン建築事務所
- 1988年 CEPT大学院都市・地域計画修士
- 1987年 末吉栄三計画研究室
- 1991年 新居建築研究所設立

- ・2016年ARCAISIAアジア建築家評議会建築賞 住宅部門

- ・2014年、2016年、2018年 JIA四国建築賞

他



アトリエ内の三つの部門の縦密な流れ



ブティックからアトリエへ



サービス道路とバックヤード

■木陰の下に広がる地域の店舗空間

高度成長期に徳島の工業地帯となり、現在では数少ない人口が増える町の新興住宅街に計画した洋菓子製造販売店である。街路沿いはフランチャイズ化した看板チェーン店舗が並ぶ。こうした状況に対し、地域素材の魅力や町に貢献できる環境空間を育むことを意識する。建築主は、緑の中で作り手と客の視線が通い合い、自然、人、お菓子が交わる場を望まれた。地域特産の新鮮素材を使ったお菓子がどのようにつくられるのか、番りを楽しみながら、子供からお年寄りまでコミュニケーションが生まれる店舗空間を目指す。地場杉材の平角柱が連続する架構で、ブティック(販売)部門、アトリエ(製造工房)部門とそのサービス空間、緊張をほぐす従業員空間をつくる。木造軸組みを保護し、木材の調湿効果などを発揮させるために屋根、壁、床下の通気性をもたせる。高い二つのヴォリューム棟に1.6mの軒を運す。軒先空間の2階南・西面には従業員のためのテラスを設け、東・北面は広場を囲む。従業員空間の廊下軸に、パティシエの作品が展示できるギャラリーを設ける。木造フレームで囲んだ正方形の広場の中心に、大空へと伸びる樹高9mのシマトネリコの樹を四本植える。地元吉野川水系の砂利を敷き詰めた広場に落ちる木漏れ日は、夏はすがすがしい風を生み、春と秋は木々の間から陽光が差し込む。街路樹のヤマモモと敷地の樹木が引き立てあうような植栽配置をし、緑の歩道空間が広がるようにする。樹木の成長に伴って冬は風をさえぎり、少ない町の緑に潤いを与える。植物は四季を通じて表情が変わる。建築の環境形成の中心性を、建物でなく樹木に据える。

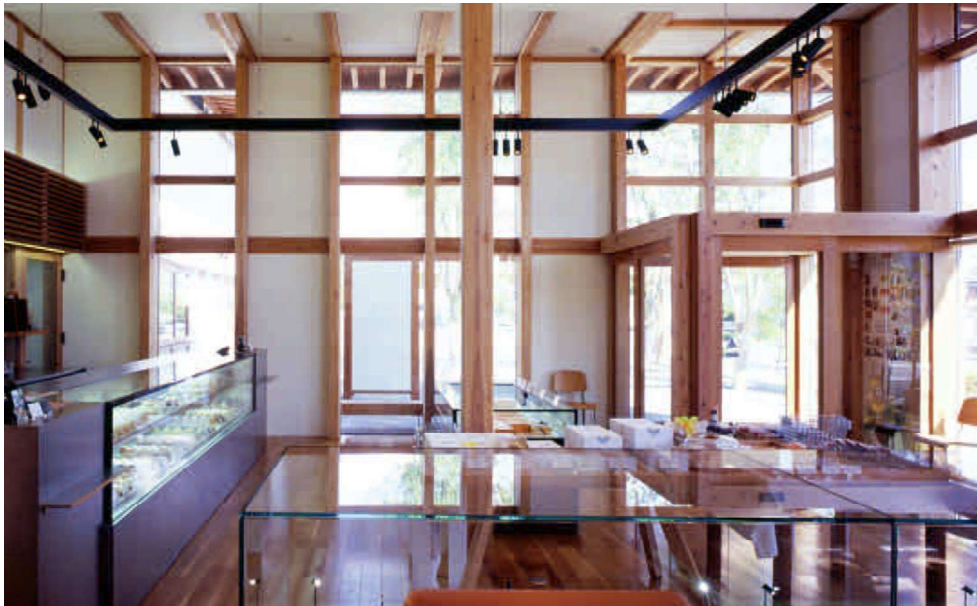
オウ・ポワヴル

徳島県板野郡北島町

Photo / 北田 英治



街路から見た夕景のブティック



ブティックから木漏れ日広場へ

木造建築への思い — 新居 照和&ヴァサントー —

■地域木材で魅力的な空間を

建築主には著名なお菓子づくり工房にいた修業時代からの想いがあった。大都市の地階に工房があったため、早朝から夜まで太陽を見ない日々であった。太陽、緑や風、四季の移ろいを感じる事が、いかに働く環境に大切に自覚されていた。緑を感じる空間の中でお菓子を作り、お客さんとお菓子を介して、感受性が働くコミュニケーションをする。土地のこだわった農産物でお菓子を作る。どこから見てもいい衛生環境にすることはもちろん、従業員のストレスを軽減すると同時に研鑽し合える場にする。こうしたオーナーシェフの想いに建築空間で応えようとした。訪れる誰もが大樹の心地よい木漏れ日を味わえる空間をイメージした。地域の木材と緑を活かした空間を介して、人と自然の豊かな関係を表現し、五感が働く場所にする。大きな木材で架構を組み、自然の恵みを感じる空間を目指した。建築主と設計者、続いて施工者が参加し、設備機械業者や庭師の応援を得、力を合わせて、様々な現実を乗り越え、実現させていただいた。徳島の風土で育った木材や石材などの建築素材を可能な限り使い、徳島でつくることを意識する。地域の自然、社会の循環が大切だと考えると同時に、地域の風景につなげる。現状では地域のポテンシャルを見だし、風景をつくる設計が大切だと考えた。木材の素材が持つ力強さを生かす建築空間は、樹木の第二の生命を生かすと言える。木の繊維特質と暖かさ、木の成分が作る香りや癒し効果、調湿性、経年変化の美が伴う。人に愛され、長寿であることが気候変動抑制の二酸化炭素固定化につながる。大きな梁間に対して、10mを超える梁にはダブルガーダーの集成材を使ったが、地場の製成品や無垢板を徹底的に使う。広場の領域をつくる10mを超える外部の梁は、金物を使わない伝統の継手で繋いだ。長寿にするために湿気をこもらさない様々な対策を行う。木造はおおらかな空気環境を作るのだが、製造部門は部門別に一年中一定の4種類の厳しい温度・湿度コントロールが要求され、工夫と挑戦が求められた。

— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —



従業員食堂に繋ぐ展示ギャラリー



木漏れ日広場から地域に開く



木で美と機能を両立 自信をもってお客様を迎えられる

Bar 余白(→8ページ)
オーナー/バーテンダー 有井 一茂さん

バーは一日の終わりにくつろげる場所。だから店舗設計にはこだわりがありました。ふんだんに木を使っているので香りが良く、それがお客様の癒しにつながっています。見た目にも美しいだけでなく、木には声(音)の反響を抑える効果も。静かに会話ができて落ち着ける空間演出にも役立っています。



店は街の一部 良い景観づくりに貢献したい

オウ・ボワヴル(→20ページ)
オーナー/シェフ 森 保介さん

山育ちだから、そもそも木がないと安心できないんです。それに“木が適切に使われることが山の保全につながる”という、環境に対する考え方や価値観を共有できる設計者と出会えたことも大きかった。建築もお菓子づくりも“文化”だと思うから、良い環境・景観づくりに貢献していきたいです。



木の良さを知るショップオーナーたち



木は自然のおくりもの あたたかな雰囲気は格別

櫻野倶楽部(株式会社とまわ)(→16ページ)
支配人 岡田 由美さん

新郎新婦の新しい感性と古民家の風情が合わかって、昔と今がつかぬる——木の建物だからできることだと思います。ご宴席のテーブル設置ではデメリットと思われがちな古民家の柱も、逆にそれがいい。歴史を経た木の柱はいい表情なんです。日本人のDNAには日本家屋の良さがインプットされているのかも知れません。



年月とともに変化して 愛着や思い出が増していく

ろうそく夜(→4ページ)
店主 元木 ともよさん

木は新しい状態から育てていって、風合いの変化が楽しいです。気楽に色を塗ったり、ディスプレイ用にクギを打ったりもできます。そういうば、化学物質過敏症のお客様が「ほかのお店では外食できないけれど、ここなら大丈夫」と。木にはいろいろな人を受け入れる、おおかさがあるのかも知れません。



可変性が高い素材だから 事業展開に柔軟に対応してくれる

阿波割烹 五十鈴(→12ページ)
女将 仁木 祐佳さん

照明を落としても、温かみのある雰囲気を保てるのが木の魅力。それに手直しが簡単に融通がきく点も優秀です。お客様のニーズに応じて増築した際も、既存の空間と自然につなげることができました。構造にも内装にも木を多用したので、店舗運営に必要な“変化”に柔軟に対応できたのだと思います。



木造建築の これから

環境デザインワークス
清水 裕昌 / Shimizu Hiroaki

コロナ禍になる以前は世界の建築を見てやろうと年に1、2回は建築を巡る旅に海外へ出るようにしていた。

ル・コルビュジエ、ルイス・バラガン、ルイス・カーン、アルヴァ・アアルト、グンナー・アスプルンド、ジェフリー・パワ、アントニ・ガウディ、アドルフ・ロース、オスカー・ニーマイヤー、カルロスカルバ...

海外で色々な建築に感動してきた。と同時に、逆に海外から日本にやって来た人々を同じように感動させられるだろうかと自分自身に問い掛けていた。その問い掛けが私を「日本文化である木造建築」に向かわせた。

例えば、金輪継ぎや割楔など伝統的な継手・仕口のディテールや合理的な木割りの考え方はずっと感嘆に値するであろう。

そしてプロポーションや寸法など、木そのものの即物的なデザインだけでなく、背後にある山のこと、さらに地球環境全体のことを考えた木造デザインが必要だと感じている。

徳島県は降水量が多く、県土の76%を占める山林は急峻である。そういった地域性に適したスギの長伐期林業によって治山治水を行ってきたわけで、川上から川下までを考えた山の循環の一部としての土着木造建築をつくっていかねばならない。

さらに、四国四県は山を介して隣接しているので、県産材というより四国産材という視点で、川上から川下までの流れを四国アイランド全体で考えていく必要があるように思う。

私は楽観的に考えている。なぜならば、地球環境や日本文化において、木造建築に託された未来が明るくないと元も子もないからである。

徳島県の森林・林業の歩み

徳島県木材協同組合連合会
網田 克明 / Amita Katsuaki

徳島の森林・林業の歴史について少しお付き合いください。

「四国三郎吉野川」は瓶ヶ森に源を発し、険しい四国山地を抜け中央構造線に沿って東進し、「阿波八郎那賀川」は四国第二の高峰、剣山の南斜面から流れ出し、二つの大河は四国山地を縫うように流れ、紀伊水道に注いでいます。中央、御荷鉢、仏像構造線が東西に走る、特殊な地質構造に起因した「海に開いた地勢」が幸いして、古くから東に向かう海路が開かれ、阿波の様々な物資が運ばれてきました。
県産材が運ばれた記録が「阿波国御吉雑抄」(日本地理学会:大正2(1913)年)に記されています。鎌倉後期の元応2(1320)年、京都下鴨神社の造営に木頭産材を寄進したという「那賀庄内大由郷文書」という古文書です。また、室町時代中期の文書「兵庫北関入船納帳」(文安2(1445)年)には、兵庫北関(現在の神戸港付近)に1年間寄港した船の積載物が記録され、当時、阿波の港から多量の木材が運ばれていたことがわかります。

このように、昔から、豊かな徳島の森で産出された木材が建築物に使われてきたのです。阿波国を拝領した蜂須賀家政は慶長11(1606)年に「奥山定書」を定め、山を厳しく管理しました。薄有林として「御林」を置いて、保護を第一として伐畑(焼畑)の開墾を容易に許しませんでした。耕地の少ない木頭では、農民は雑穀の作付けを認めてもらう代わりに伐畑の作跡にスギを植え付けました。(植林の)記録として最古のものとなる阿田家文書には、農作物を収穫した御礼に畑一枚につき杉苗百本宛を献植した顛末が記載されています(徳島県史)。森は人々の暮らしと共に成り立ってきたのです。
明治以降、鹿澤置県(明治4(1871)年)に先立ち、こうした薄有林は民間に払い下げられました。徳島は国有林の少ない県ですが、その後民有林中心の林業が発達することとなるのです。

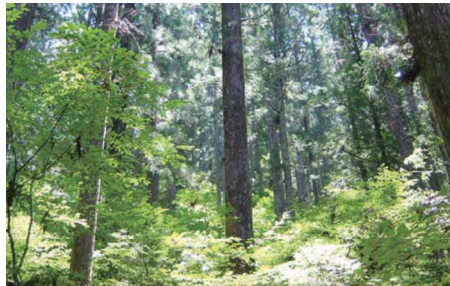
明治期の日清・日露戦争、大正期の第1次世界大戦前後には木材需要が極端に高まりました。この頃、奥地の天然林まで伐採されましたが、一方では、山林荒廃の防止と資源培養を目的として、大規模な植林が進みます。そして、昭和初期には世界恐慌の波が本県にも及びました。この時期、那賀川河口の製材業は技術革新に取り組んだのです。最新の高速製材技術を導入し、良質なスギ薄板の大量生産体制を確立しました。
当時の状況が文献にも記載されています。「阿波の二分三、三分板は阪神市場の下見板や堀廻り板の八割を供給するに至った。良質な幅広の板は天井板にも使われた。材質は赤味の部分が多く、下見板に使った場合、白味よりも腐りにくく、節の部分が長期間抜け落ちない、いわゆる「生節」であり、その点からも下見板として評価された」(引用:北尾邦伸「木頭林業における木材市場の展開」京都大学農学部演習林報告、1968、197)。明治、大正と人々が造成してきたスギ人工林資源を背景に、製材技術が確立され、西日本有数の製材工業地帯が那賀川流域に形成されたのです。

その後、戦後復興期を経て、高度経済成長時代には旺盛な木材需要に対応するため外材輸入が本格化しました。昭和46年には臨海型木材団地が津田に完工し、那賀川河口の製材の方々の多くが進出しました。第1次、第2次オイルショック後の昭和50年代後半には、深刻な木材不況となりますが、本県の林業、木材産業は大胆な再編整備により、木材の高次加工等、付加価値の高い分野に取り組む、さらにスギ足場板や梁桁等構造材、住宅内外装材の商品開発、技術開発を進め今日に至っています。

木材は育った時間よりはるかに長い時間、建築物でその生命を保ちます。徳島の気候風土で育った徳島スギが、徳島の街づくりにお役に立てれば幸いです。



■那賀川の流筏(写真提供:玉置製材株式会社)

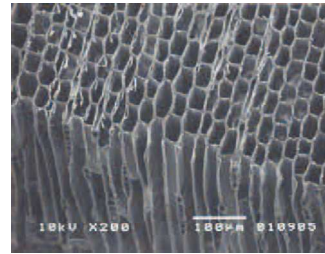


■高樹齢のスギ林(海陽町)。下層木に広葉樹があり豊かです

【参考】1)網田克明「徳島スギの新たな活用に向けて」山林(2016) 2)網田克明「未来につなげる長国-森南部の林業史-」徳島県技術士会会報Vol.25(2017)

木で囲まれた空間の快適性

木の温かみ



建築物に木材が多く使われていると、心がなごみ、快適に感じられますが、それには理由があります。これは木材の木目や手触り、香りなどがヒトに心地よい感覚を与えるからだと言われています。

木材表面の微細な細胞の凹凸は、波長の短い青から紫、さらには紫外線の光の反射を弱め、赤から黄色までの暖かみのある色を反射します。特に有害な紫外線はほとんど反射されず目に優しい素材です。

写真は徳島スギの細胞表面を電子顕微鏡で撮影したものです。仮道管という紡錘状の細長い細胞が、蜂の巣状に整然と並んでいます。側面はまるで小さな凹面鏡のようでもあり、スギの表面がときに絹のような美しい光沢を生み出すのは、このような細胞構造に起因しています。

また、材料の温冷感には、熱伝導率(熱の伝わる速さを表す量)が関わっています。鉄やコンクリートなど熱伝導率が高い材料では人の皮膚から熱が逃げやすく、冷たく感じられます。その点、スギは、細胞の97%は仮道管で構成され、熱伝導率の低い空気を多量に含み、細胞壁自身も熱伝導率が低いため、触っても温かく感じる素材です。

■写真提供:徳島県立農林水産総合技術支援センター

香りの心地良さ

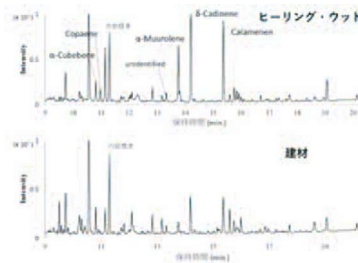
当連合会会員の「徳島県木の家づくり協会」が、九州大学農学研究院、徳島県立農林水産総合技術支援センターらと内装木質化の効果、つまり木材を室内に使うことが快適性にどのように関わっているかを科学的に検証しています。

実験室に、徳島スギ床材(ヒーリングウッド丹色/徳島県木の家づくり協会商標登録商品)と市販建材を施工し、床材から放出される揮発性成分の違いがヒトの生理・心理応答にどのような影響を及ぼすかについて分析しました。

その結果、徳島スギ床材は市販建材と比べ、「居心地が良い」「親しみやすい」などの項目で評価が高く、さらにヒトをリラックス状態に誘導する効果や、血圧の低下など交感神経活動を抑制する作用を持つ、スギ由来のセスキテルペン類の放出量が多く、抑うつ・落込みなどネガティブな心理状態を改善させ、ヒトの生理・心理面に好ましい影響を及ぼす可能性が示唆されました。
このような材料を建築にうまく使うことで木本来の香り成分を活かすことができると考えています。



■写真提供:九州大学農学研究院
■資料提供:九州大学農学研究院



街の中に木の香りを

木の香りを嗅ぐと、安らぎ、ほっとするのは、太古、我々が森の中にいた時の記憶からでしょうか。

何かとストレスの多いこの社会ですが、身近な所に木をうまく使うことで、生活環境を変え、快適に過ごすことができるかも知れません。

街で、オフィスで、木質化された空間が一時のくつろぎの時間をつくってくれる。これまで長くヒトと付き合ってきた木がその手助けをしてくれていると思います。

■資料提供:「内装木質化プランの一例」徳島県木の家づくり協会



晴耕外観



改修全景

| | |
|-------|--------------------------------|
| 敷地面積 | — |
| 延床面積 | 晴耕:82.60㎡ 雨読:64.76㎡(浴室等を含む) |
| 最高の高さ | 晴耕:7.92m 雨読:6.56m |
| 軒高 | 晴耕:3.83m 雨読:2.73m |
| 地域地区 | — |
| 主体構造 | 木造 |
| 基礎 | 玉石基礎 |
| 屋根 | 茅葺き |
| 外壁 | 土塗壁の上ヒヤギ竹張り |
| 建具 | 木製建具 |
| 内部仕上げ | 珪藻土塗 |
| 設計期間 | 2010年10月~2011年7月 |
| 工事期間 | 2011年9月~2012年3月 |

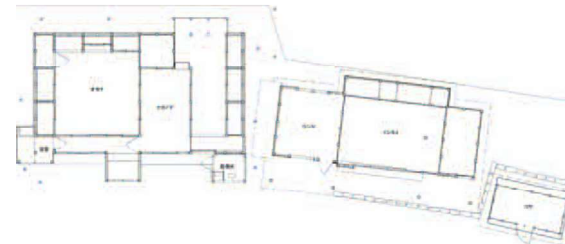


雨読外観

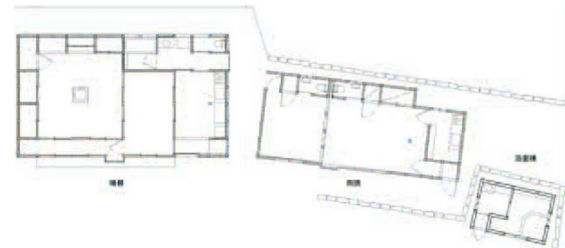


既存全景

→ 現況全体平面図



→ 改修全体平面図



この建物は三好市東祖谷山村落合重要伝統的建造物群保存地区の中腹に位置する。主屋と隠居屋、小さな小屋が石垣で造成された細長い敷地に一列に並び、この地方の典型的な屋敷構えを有する民家である。空き家となっていたものを三好市が借り受け、リノベーションを行い、主屋を「晴耕」、隠居屋を「雨読」と名付け、宿泊施設として活用している。リノベーションにあたっては、2棟とも伝統地区内の特定物件であるため、外観は保存計画に基づいた復原を行い、内部は祖谷の民家の特性を生かしながら、宿泊施設にふさわしい快適性を確保することが求められた。主屋、隠居屋ともに茅葺きの屋根を組みかえて、勾配の緩いタン葺きの屋根にする「小屋下げ」や一部に増築が行われていたため、外観は当初から大きく変わっていた。そこで小屋組や外壁の痕跡調査を行い、屋根は茅葺きに、外壁は土壁の上にこの地方独特の仕上げである真竹を製した「ヒヤギ竹」張りであったことが判明し、当初の形態、仕上げに復原している。内部は空き家が永かったためか、生活様式の変化に伴う改変は少なかった。祖谷地方の民家の空間特性を損なわないよう、既存の間取りや当初の設えを生かしながら、宿泊施設に求められる機能を配置している。隠居屋には浴室を設けるスペースがなかったため、南側の小屋の形態をそのままに、浴室棟として新築している。冬季の寒さ対策としては、外壁や床下には断熱材を施し、外部建具は雨戸+ペアガラス入りの框戸+障子と三重にするなど、機密性と断熱性を高めた上、床暖房を施した。耐震性能は限界耐力計算により確認、いずれも限界変形角は1/20rad以上を確保している。

Architect



喜多 順三 Kita Junzo
空間計画研究所
徳島県徳島市安宅1-5-11
•TEL 088-652-7887
•FAX 088-652-7837
•MAIL jkita@nifty.com

プロフィール

1979年 東京工業大学建築学科卒業
1981年 東京工業大学大学院
社会開発工学専攻修了
1981~99年 JA設計
1999年 空間計画研究所設立



晴耕内観



雨読内観1(写真提供:三好市教育委員会)



晴耕内観2



工事写真

木造建築への思い — 喜多 順三 —

三好市東祖谷落合集落や海部郡牟岐町出羽島の民家の保存修理に関わることが多いため、伝統工法で建てられた木造建築に触れる機会に恵まれている。これらの建築物は、その土地で入手可能な木材や土、石、植物などの材料が多用され、取り壊されることがあっても、柱材や梁材、壁土などは再利用される循環型の仕組みを持っていた。さらに、微地形を利用した災害の備えや、気候風土に応じた構法や様々なディテールなど、建築の持続可能性を考えるうえで学ぶべき点がとても多いと思う。また、木造建築、特に伝統工法の場合、修理の容易性を特徴として挙げることができる。様々な仕口や継手を用いることで、柱の交換や根継ぎ、梁の架け替えなどができ、建築物の長寿命化を図ることも可能だ。しかし、こうした伝統的な建築技術の継承が困難な状況に直面している。様々な技術や工法が開発され、新しい木造建築が生まれることは重要なことと歓迎しているが、大工や左官、石工、屋根葺きなどの伝統技術や木材を供給する林業の持続可能性も重要であり、このことに少しでも貢献できればと思っている。



雨読内観2(写真提供:三好市教育委員会)

(株)日新四国工場 社員休憩所

徳島県小松島市横須町

設計・監理 島津臣志建築設計事務所
 企画 (株)ヒトカラメディア
 施工 (株)坂本工務店
 主要用途 休憩所



100人が収容できる休憩室-1



通路-3から休憩室-1を見下ろす



合板を利用して製作したテーブル、ソファ

| | | | |
|-------|---------|------|----------------|
| 敷地面積 | 59,604㎡ | 地域地区 | 工業地域 |
| 延床面積 | 462,83㎡ | 主体構造 | 木造 |
| 規模 | 地上2階 | 基礎 | 布基礎 |
| 最高の高さ | 7,8m | 屋根 | ガルバリウム鋼板タテハゼ葺き |
| 軒高 | 7,43m | 外壁 | ジョリバト左官仕上げ |
| | | 建具 | スチールドア、アルミサッシ |

| | |
|-------|---|
| 内部仕上げ | 床:モルタルコテ押入、ビニルフロアタイル、和紙畳 壁:ビニルクロス 天井:構造材現し、ビニルクロス |
| 設計期間 | 2018年4月~2018年8月 |
| 工事期間 | 2018年9月~2019年3月 |

Architect



島津 臣志 Shimazu Takashi
 島津臣志建築設計事務所
 徳島県名東郡佐那河内村下字中津5-7
 ・TEL 088-602-7730
 ・FAX 088-602-7740
 ・MAIL takamaz@gmail.com
 ・HP http://www.takashishimazu.com

プロフィール

2000年 専門学校穴吹カレッジ 建築デザインコース卒業
 2002年~2010年 建築設計事務所蔵
 2010年~2014年 有限会社 内野設計
 2012年~ 島津臣志建築設計事務所設立

受賞歴

・2020年 第33回日経ニューオフィス賞 四国ニューオフィス推進賞
 「(株)日新四国工場社員休憩所」

■所属 / 日本建築家協会 徳島県建築士会



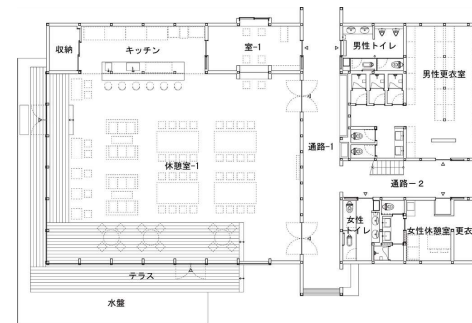
デッキテラスと水盤



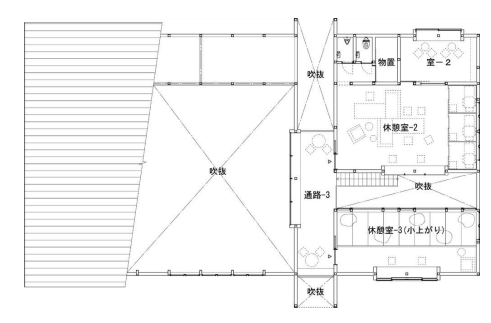
個室ブースを備えた備えた休憩室-2

木造建築には欠かせない合板を製造している(株)日新四国工場の社員休憩所の建て替え計画。築50年を超える鉄骨平屋の休憩所が老朽化していたのを機に、24時間稼働の工場で働く従業員が質の良い時間を過ごせるような休憩所をつくりたいと設計の依頼があった。無機質なスレート葺き鉄骨造の工場が建ち並ぶ中に、徳島すぎを使った居心地のいい木造建築をつくることとした。また、古い休憩所では、広いワンルーム空間に従業員が入れ替わり立ち替わり様々な過ごし方をしていた。食事をしたり、テレビを見たり、ソファで休んだり、談笑したり——。自由で混沌とした使い方を踏襲しながら、めいめいの休憩時間をより快適に過ごせることを念頭に置き、クライアントからの要望を整理した結果、大きさと性格の違う3つの休憩室を配置することとした。100人参加の全体会議をする一番大きな休憩室は、8間×6間を無柱空間とするために杉材のトラス梁を用いた構造現しの空間とした。その他には個室ブースを備えた部屋、畳小上がりのある部屋がある。これら3つの休憩室をそれぞれ独立させるために、T型の半屋外通路を設けたが、これにより、工場、事務所、駐車場の3方向からの動線処理も解決した。また、この通路には、桜を目の前にできるベンチを設け、4つ目の居場所をつくることのできた。ルーティンになりがちな毎日において、その日の気分によって過ごす場所を選び、リフレッシュして仕事に取り組みてもらえたらと願っている。

→ 平面図(1F)



→ 平面図(2F)



(株)日新四国工場 社員休憩所

徳島県小松島市横須町

Photo / 米津 光



西側外観夜景



休憩室-1 夜景 天井吊りの照明器具は合板を利用



南側外観夜景



北側外観夜景



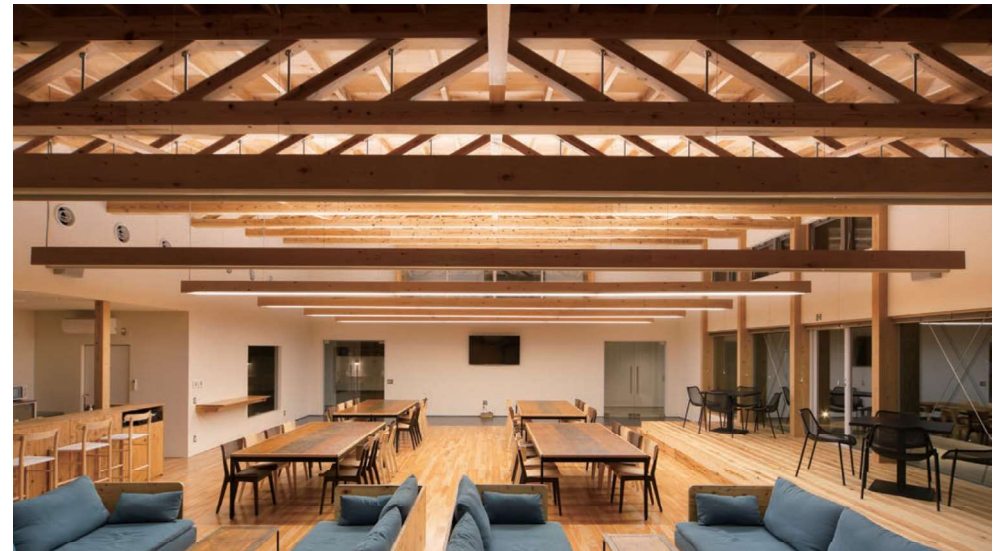
小上りのある休憩室-3



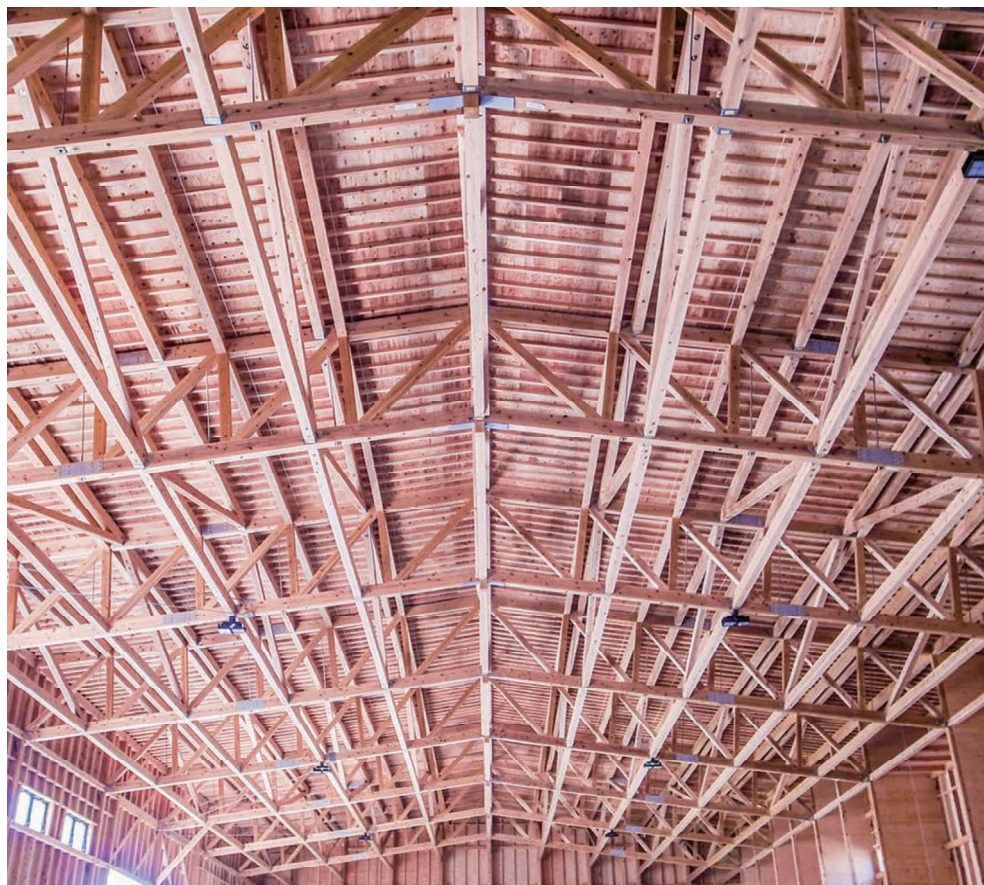
休憩室-1に設けられたキッチン

木造建築への思い — 島津 臣志 —

店舗や施設的设计において、求められる用途、規模、コスト、法規等を考慮して、合理的に木造にたどり着くこともあれば、人がくつろぐ場所だから木に囲まれた居心地のいい空間にしたいという情緒的なやり取りを経てたどり着くこともある。前者と後者を行ったり来たりしながら、設計がある程度進んだときには、すでにどちらが出発点だったかわらなくなっていることも多い。自分自身はこれまで、後者の想いが強く、木造を建てることを考えてきた。現在、進行中のプロジェクトに建築で使用する製材を、県内の山から切って、乾燥させ、製材にするまでの一連の流れに関わろうとしているものがある。これまでの自分の仕事においては、現場で合流するまであまり意識していなかった流れである。こっち側とあっち側のふたつの流れを気にかけてながら進めている。自然の中で生きている木を扱う以上、こちらの思い通りにいかないことがあると頭では理解していたが、伐採時期など想像以上に山側と建築側の細やかな調整が必要なのを知った。これまで、林業や山のことを学ぼうと、山に入って話を聞いてきて、少しずつ理解しはじめていたが、このプロジェクトによってさらに山のことが見えてきた今、建築家として、山とまちをつなぎ、人の営みを支える木造建築をつくることで、建築家として次の世代へより良い風景を残すことに寄与したいと考えている。



窓際には一段上げたデッキテラスがある



木造トラス

| | | | | | |
|-------|----------|------|-----------------------------|-------|-----------------|
| 敷地面積 | 2357.74㎡ | 地域地区 | 工業専用区域 | 内部仕上げ | なし |
| 延床面積 | 999㎡ | 主体構造 | 木造トラス | 設計期間 | 2014年3月~2014年9月 |
| 規模 | 木造平屋 | 基礎 | 鉄筋コンクリート造布基礎 | 工事期間 | 2014年9月~2015年2月 |
| 最高の高さ | 10.09m | 屋根 | ガルバリウム鋼板葺き | | |
| 軒高 | 8.39m | 外壁 | ガルバリウム鋼板・防火サイディング・ウッドサイディング | | |
| | | 建具 | アルミサッシ | | |

Architect



真鍋 憲資 Manabe Kenji

studioKEN

徳島県徳島市元町2-14 新町橋ビル3階

TEL 088-635-4272

HP <https://www.studioken.info>

プロフィール

- 1985年 徳島市立八万小学校卒業
- 1988年 徳島市立八万中学校卒業
- 1990年 徳島県立徳島工業高等学校機械科中退
- 1995年 株式会社山田組
- 1997年 自営業
- 2003年 株式会社リスコ
- 2006年 株式会社住スタイル研究所
- 2008年 studioKEN設立

受賞歴

- ・2014年 徳島県木の家コンクールリフォーム部門 県知事賞
- ・2018年 第15回徳島市「街づくりにデザイン賞」リバーサイド物語賞

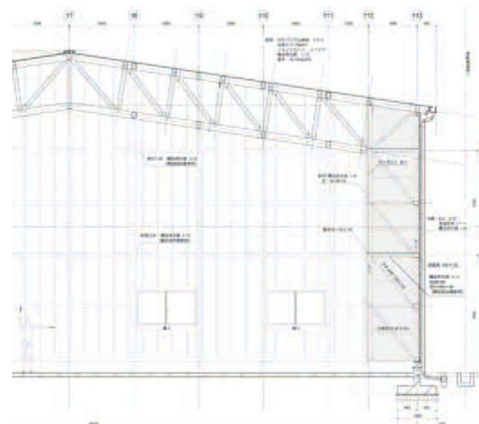


建て方状況

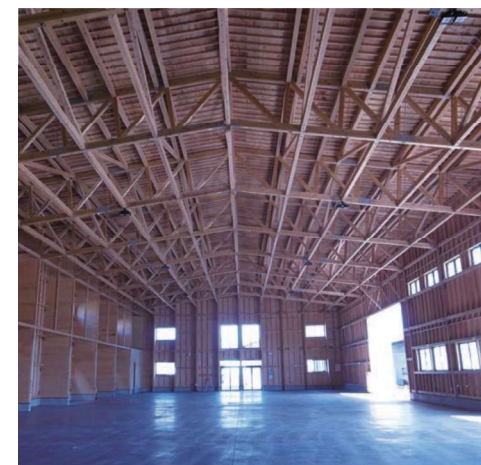
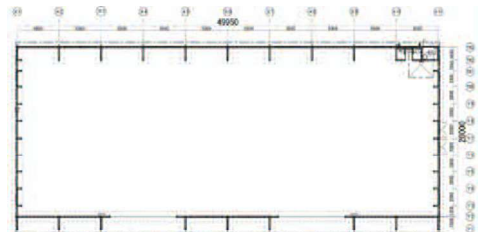


建て方状況

→ 短計図



→ 平面図



内観

近年では木造建築物の大規模化が進められている。木造といえば住宅規模であればなじみもあるが、ある時期から大型建築物や特殊建築物に木造が選ばれなくなって長い月日が流れた。しかし、林業の衰退による山の荒廃やCO₂削減が叫ばれる今日において、建築物の木造化は環境を守るという重要な行為と考えられる。そんな中で、木造建築のプレカット加工を担うマツシマ林工株式会社が機械加工での大規模木造トラスの研究開発を進めている。プレカットマシンで扱える材径で施設として利用できる大空間を確保する建築の開発である。この物件はその第一号となる。スパン間を20m飛ばし大空間を確保、約1000㎡の大空間を実現することができる。大規模木造の可能性として大きな期待がかかる。なお、愛媛県にも約700㎡の木造トラス建築ができています。プレカット化することにより汎用性のある建築構造を提供できるといえるだろう。

マツシマ林工株式会社 木造倉庫

徳島県徳島市津田海岸町



木造トラス



外観南面



木造トラス

木造建築への思い — 真鍋 憲資 —

古くから日本の建築の多くは木造で作られてきた。国土の7割近くが森林である、気候風土や災害の多発する日本では、木造という工法が適していたのであろう。さらに、自然豊かな徳島県では海や山と触れ合う機会も多く、自然を愛する人も多い。木(木造)への愛着を強く感じる人も多いと思うことがある。木造住宅を建てるとなると大工さんや工務店のようなそれなりのスキルが必要になるが、ちょっとがんばれば素人でも木で棚を作ったり、ちょっとした家具を作ったりできる。それだけ身近で親しみのある素材なのであろう。これまでは、大規模建築や公共建築では木材は内装材などに限定された使われ方になっていたが、法整備や技術開発により様々な用途や規模で木造化できるようになってきた。建物を木造化することによってこれまでよりも愛着と親しみもてる施設が増えていくと期待している。



外観東面



木造トラス

徳島ヴォルティス クラブハウス

設計・監理 有限会社 内野設計 施工 株式会社 亀井組 主要用途 クラブハウス(事務所)

徳島県板野郡板野町



上機時のドローン写真

| | | | |
|-------|------------|------|-----------------------|
| 敷地面積 | 64,169.03㎡ | 地域地区 | — |
| 延床面積 | 993.02㎡ | 主体構造 | 木造 |
| 規模 | 木造2階建て | 基礎 | 鉄筋コンクリート基礎 |
| 最高の高さ | 10.03m | 屋根 | ガルバリウム鋼板タテハゼ葺き |
| 軒高 | 8.04m | 外壁 | ガルバリウム鋼板タテハゼ葺き 一部杉板張り |
| | | 建具 | 鋼製建具・木製建具 |

| | |
|-------|-----------------------|
| 内部仕上げ | 杉構造材現し 杉板 構造用合板 |
| 設計期間 | 2019年9月～2020年8月 |
| 工事期間 | 2020年8月～2021年3月 |

Architect



内野 輝明 Uchino Teruaki

有限会社 内野設計

徳島県徳島市方町5-71

・TEL 088-626-9567
・FAX 088-626-9568
・MAIL uch@uchnet.net
・HP http://uchnet.net

プロフィール

1986年 大阪工業大学卒業
1986～90年 山本西原建築設計事務所
1990～91年 海外視察
1991～92年 瀬湖建築設計室
1992～99年 高崎正治都市建築設計事務所
1999年 内野輝明建築設計事務所設立
2005年 有限会社 内野設計に改組

受賞歴

・第29回INAXデザインコンテスト金賞
・日本建築士会連合会第8回まちづくり大賞
・2016年日事連建築賞「奨励賞」
・awataくよんプロジェクト最優秀賞

■所属 / 日本建築家協会 日本建築学会 徳島県建築士事務所協会 徳島県建築士会 木質構造研究会 木の建築フォーラム

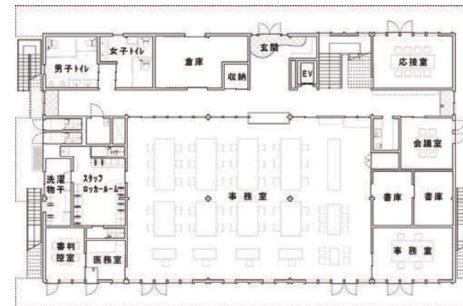
— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —

徳島ヴォルティス クラブハウス
徳島県板野郡板野町

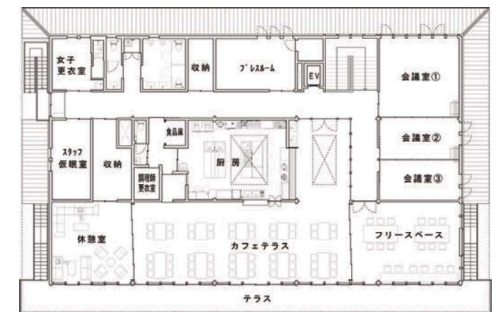


グラウンド側詳細

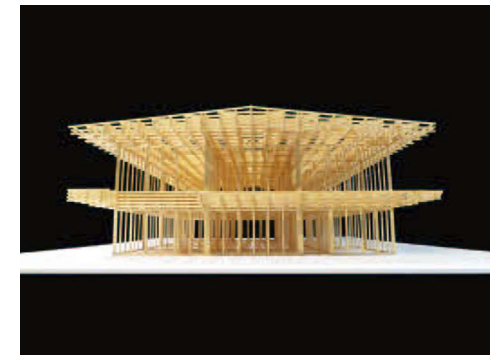
→ 平面図(1F)



→ 平面図(2F)



3.11以降、徳島で何ができるかを考えてきた。まず「仮設住宅試行」を構造材と板壁のみで建ち上げる板倉構法でつくった。板材の産地徳島で常に乾燥させながら積んでおく備蓄の仕組みが、福島仮設住宅への迅速な材料供給を可能にしたと聞いていたからである。続く「先行高地移転試行」では既存の峠道に沿って連なる細長い建築群をつくった。東南海・南海地震が起これば、復興の動きから取り残されるであろう徳島県南部の漁村でこのプロジェクトでは、当初から木材備蓄の可能性に着目した。柱材だけで建築ができれば重機は不要。柱材だけ備蓄すればよく、さまざまな寸法の部材を必要とする従来の在来軸組構法に比べて備蓄は格段に容易になる。備蓄する期間で天然乾燥材ができるとなれば、「日常の林業の振興策が非常時の仮設住宅の供給をスムーズにする」ことにつながる。現場では、上部木造部分の持ち出しを、一期の方杖から、二期では柱材を交互に積み重ねる重ね梁構法として工期をぐっと短縮できた。「徳島県応急仮設住宅」と「木材備蓄倉庫」では重ね梁で屋根をつくり、土台から屋根まで完全に柱材のみによる建築ができた。さらに中規模木造建築を柱材だけで建てられたら、備蓄の輪はより大きく広がる。多くの柱材が備蓄倉庫にあれば、避難生活を支える応急仮設住宅のみならず、復興期のさまざまな施設の建設に回すこともできる。これまでの取り組みは規模を問わずすべて平屋であったが、このクラブハウスは2階建て、延床面積約1,000㎡。2021年春に過去最大の四寸角の純柱材建築として竣工を迎えた。

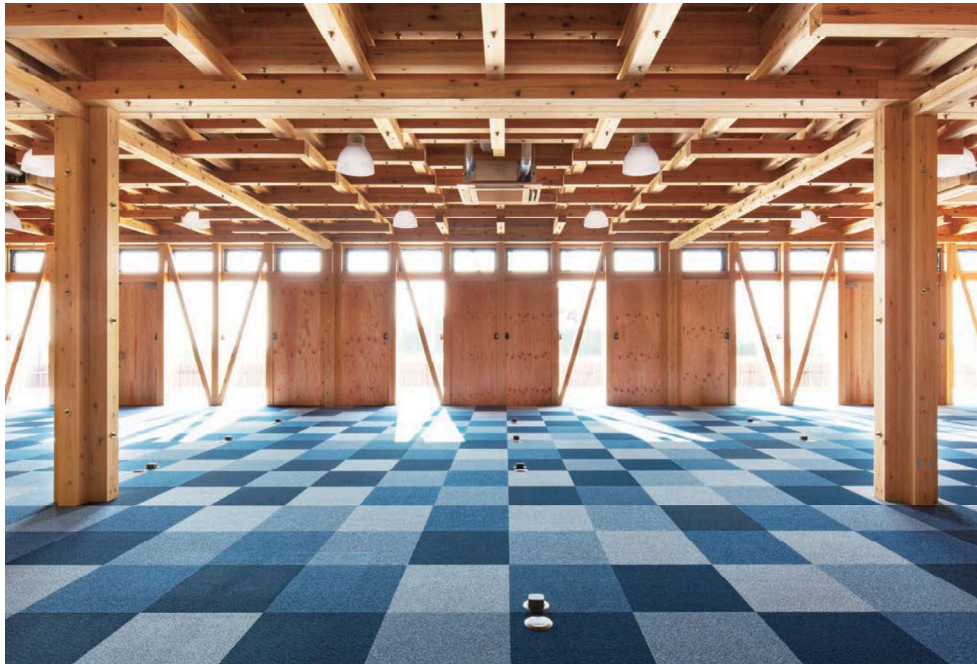


架構モデル

徳島ヴォルティス クラブハウス

徳島県板野郡板野町

Photo / 米津 光



1階事務室



カフェテリア前のバルコニー



階段



ゲートルーム



軒裏の表情



受付を見る

— Non-residential timber architectures by Tokushima Architects —

徳島ヴォルティス クラブハウス
徳島県板野郡板野町

木造建築への思い — 内野 輝明 —

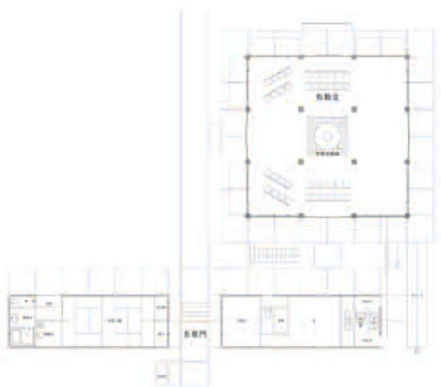
現場に行ってワクワクするのはなんといっても木造です。林の中にいるかのようにすがすがしい気分になります。杉材にふんだんに含まれるフィトンチッドのせいか、そもそもいい香りがして何とも言えず癒されます。10年ほど前に木造建築についてみんなで学べる場をつくろうと始まったとくま木造建築学校で、山の人、製材の人、木製品を作る人、研究者、先生、木造好きな設計者や工務店の方などいろいろな立場の方と知り合いになり、教えてもらい、みんなの知恵が重なって木造建築ができていくことを知りました。現場で、大工さん、建具屋さんや家具屋さんから木工職人のみなさんの技を見せてもらったり、みんなや監督さんと一緒に納まりを考えたりする時間は本当に楽しい。伐採ツアーに参加して林に入って杉に横を打ち込んで、倒れるときの大きな音聞き、年輪を数え、またその山々をはなれた所から見渡してみると、何十年というサイクルで人の手が入った自然の大きな循環の一部が建築になっているんだなあと思えます。今、80年生を超えるような大木が売れません。それをどのように建築化していくのかを考えるのは我々建築家の使命だと思います。木造建築には伝統構法、在来軸組構法、枠組壁構法他、さまざまなやり方がありますが、これと決めつけずに、山の状況を知り人たちがともに考えていく必要があります。例えばこの10年間に建てられるべき木造建築は、次の10年では変わっているかもしれない。みんなでやわらかく考えて、いろいろな木造建築を建てて、徳島をもっと木造化していきましょう。



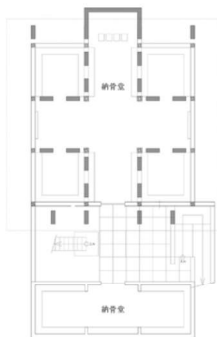
弥勒堂イメージパース

| | | | | | |
|-------|---------------------|------|--------|-------|-----------|
| 敷地面積 | — | 地域地区 | — | 内部仕上げ | 木製+コンクリート |
| 延床面積 | 430㎡ | 主体構造 | 木造+RC造 | 設計期間 | 2018 - |
| 規模 | 木造+RC造 地下1階地上1階建 | 基礎 | RC造 | 工事期間 | 2021 - |
| 最高の高さ | 8.1m | 屋根 | 和瓦葺き | | |
| 軒高 | 4.3m | 外壁 | 木製 | | |
| | | 珪藻土 | 木製 | | |

→ 平面図 (1F)



→ 平面図 (B1F)



Architect



松田 公彦 Matsuda Kimihiko
株式会社 MATSUDA Kimihiko Studio
徳島県鳴門市鳴門町三ツ石字八軒浜84-1
・TEL 088-683-6661
・FAX 088-683-6661
・MAIL ika-mks.ma@gmail.plala.or.jp

プロフィール

1985年 多摩美術大学建築科卒業
1985-91年 (株)サンホームデザイン
1991-2000年 野口政司建築事務所
2000年 MATSUDA Kimihiko Studio設立

→ 立面図



平安後期に造立したとされる重要文化財「弥勒菩薩坐像」を安置する「弥勒堂」の計画。寺務所機能を持つ「長屋門」と、地下には「納骨堂」を併設する。「弥勒堂」は坐像造立と同時代の社寺建築の様式・構法、具体的には鎌倉初期に重源により宋から持ち込まれた、「浄土寺 浄土堂」に現存する大仏様(だいぶつよう)と呼ばれる様式を参考に新たな木造建築を模索する。構法美がそのまま意匠美となる大仏様の様式は、機能的・合理的な造形理念のモダニズム建築にもつながると考え、単に歴史や技術の継承のみではなく、現代建築の感性や技術を生かし、大仏様とモダニズム建築の様式・理念を融合することにより、今と調和し未来へと受け継がれる社寺建築を提案する。木造部分は柱と貫に、金属製の樫や木舞を模した金属と木のパネルを組み合わせた構造とする。また寺という用途上、修理を繰り返しながら永く人々に親んでもらえる建築でありたいとの思いから、これらのパーツには木部の経年変化に合わせ調整可能な機能を持たせ、修理の際には解体復旧可能な構造とする。柱は今後調査が難しいと思われる無垢材1本の柱とせず、現代規格の断面の材を4本合わせ、松江城や東大寺大仏殿に見られる寄木柱とする。この構法により、どの時代においても安易に調達できる材での修理が可能となる。

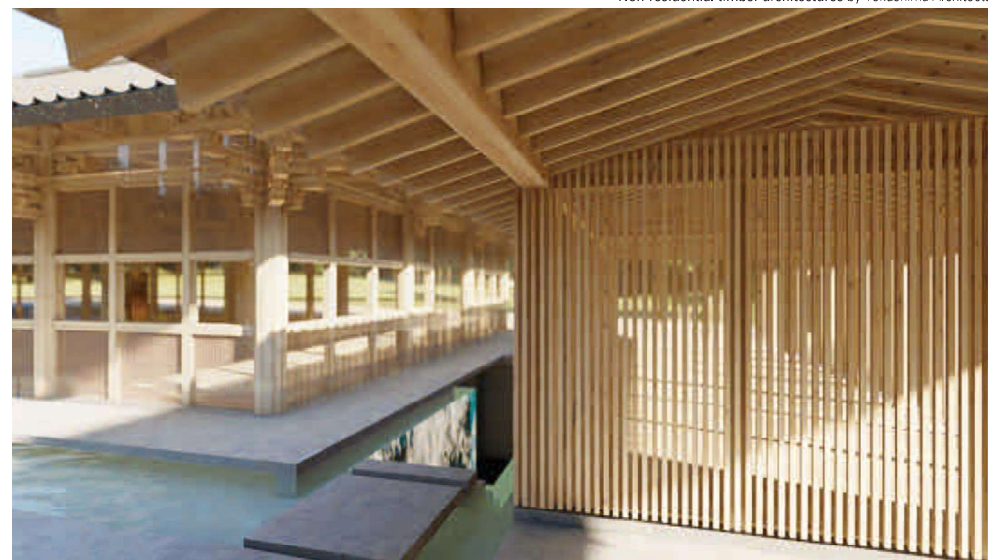


東林院プロジェクトVer.1

徳島県鳴門市大麻町



長屋門イメージベース

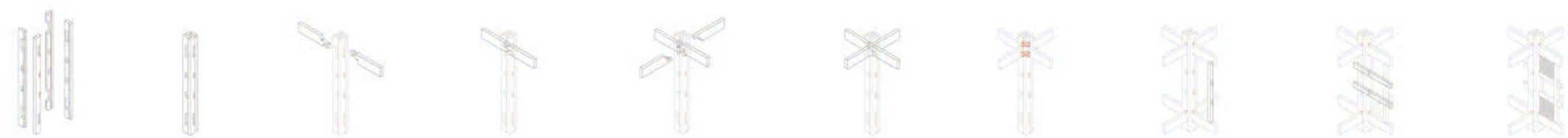


弥勒堂 長屋門外観

— 架構 ▶▶▶▶▶ 木造伝統構法とRC造のハイブリッド架構



— 構法 ▶▶▶▶▶ 木造伝統構法と金属製金物のハイブリッド構法



木造建築への思い

— 松田 公彦 —

建築を創る際、特にコンテンポラリーな建築を設計する場合、建築の質を決定する上で、コンクリートや鉄、ガラス等の工業製品と木や石などの自然素材の組み合わせは非常に重要な要素となります。構法・構造を問わず、それぞれの素材特性を生かした建築を創りたいと思っています。特に木造・木質化の場合は、極力木を特別扱いしないこと、コンクリートや鉄と同列の素材として木を扱うことを心がけ、新たな構法や構造などをシミュレーションします。また、歴史的に受け継がれてきた「木の文化」や「日本人の美意識」「伝統に培われた技術」をいかに継承していくかなどの課題への取り組みは、新たな構法の構築以上に必要であると考えます。モノに宿る固有価値ではなく、精神性、技術の継承、持続可能な構法・構造、時代の要求などを意識しながら、その建築にふさわしい素材や構法を選択し、その中で木の特性や良さを最大限引き出して、アジャスタブルな木造建築を目指したいと思っています。

これから

～林業家 岡田育大氏に訊く～

木材を通じて山の価値を伝えていく

徳島市内より国道195号を進むと約2時間。那賀町木頭にたどり着く。年間3000ミリを超える降水量と温暖な気候は杉の育成において相性が良く、古くから木頭林業地帯として繁栄した。1980年、林業家の19代目として生まれた岡田育大氏。それまで順調と思われていた木材業界だが、安価な輸入材の増加や木材以外の代替品の普及で国産材は使われなくなっていた(2002年木材自給率は過去最低の14.4%)。会計士としての顔も持つ岡田氏に異なる職種の理由を尋ねた。「第一次産業はなかなかお金にならない時代。それであれば資格を取得して手に職を持ちながら続けていた方が良いんじゃないかと、あえて林業会社一本ではない戦略を選んだという。岡田氏のDNAに刻まれた森からの学びが時代を変えていくのか。

木質バイオマス

温室効果ガスの削減、化石燃料からの転換は世界の課題でもある。2018年にゲンボク市場(小松島金環町)にアジア初の設備で木質バイオマス発電所の運用を開始した。チップ材を有効活用する方法を自社で持ちたいと、木材市場の立地を生かして「100%地域の木材で」電気エネルギーを生み出すことに成功した。「化石燃料に頼らない方法は持続可能な地球のサイクルだ。課題も多いが地域材で作るクリーンな電力を皆さんにも使っていただければ」。電力の価値を形にしたいと話す。

林業は保全か

「林業は山に負荷をかけている」。まずこう話した岡田氏。人の手で植えられたスギ、ヒノキは何十年という長い時間をかけて成長し、やがて木材として収穫される。その間に山の手入れが滞ると地表からは植物も芽を出さない真っ暗な森になる。山に人が入り、山にとって良い選択(施業)を行ってきたことが林業家として19代続いてきた証しなのかもしれない。先人より受け継いだ森を生かす、その場所にとって最善の方法を常に模索している。そのひとつに「1人、2人でも持続的にできる自伐型林業(※)は自然と人間の共存において最善な林業の形態だ」との思いを抱いている。

※自伐型林業...採算性と環境保全を高い次元で両立する持続的森林経営。

木材の流通

「山で切った木がどこで、誰に、使われているか分からない時代が続いた」と岡田氏。今後は従来の多段階流通ではなく、近年の産直市のような生産者と消費者の顔が見える流通が木材でもスタンダードになるだろう。そうすると原木市場としての役割は少なくなっていく。「市場としての固定観念ではなく、機能として何を残すのか。素材生産者、市場、製材所、工務店との情報連携が、私たちの木、徳島の風土で育った地域材を消費者に使ってもらえることに繋がるのではないかと。素材生産者から市場の連携を生かして、建築家の皆様にも私たちの木を使って素敵なまちづくりに生かしてほしい」と岡田氏は話してくれた。

森にとってより良い選択で、自然と人間の共存の実現へ



林業家
岡田 育大 Okada Ikuhiro



徳島県那賀町木頭に代々続く山林



「林業は未来に繋がる仕事。常に未来を見据えて活動し、良き未来を作っていきたい」と話す岡田氏。少しずつだが山に人が戻りつつある



地域材を使ったエネルギーの循環、ガス化の際に生じる熱はチップ材の乾燥に利用



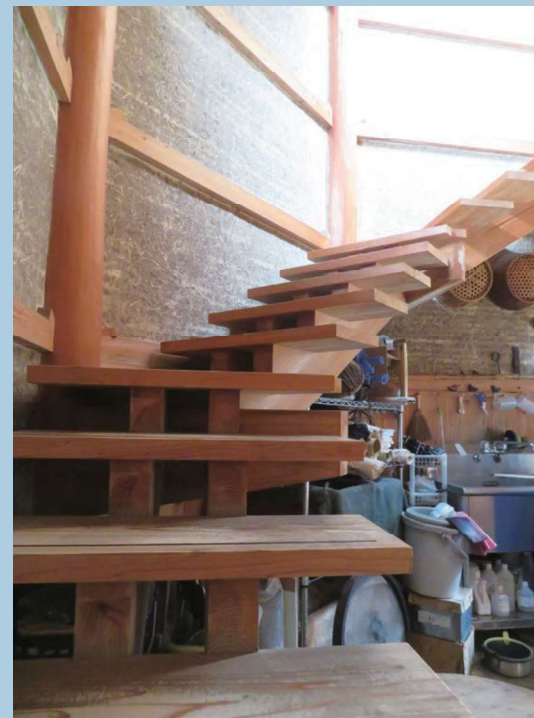
一本一本の木に刻印が打たれる。「十一(トイチ)」は岡田家に代々続く刻印



◀小松島市金環町のゲンボク市場では県内各地より集められた良質な木材がセリにかけられる。写真は80年生木頭杉の造材



株式会社フォレストバンクのみなさん、次の世代へ技術を継承



JIAの黎明期に会員になられた徳島地域会の先輩方の一人、富田眞二さん。素晴らしい建築もたくさん残されましたが、自分のことはさておいても人と人をつなぐことや後輩たちを育てることにいつも一生懸命な方でした。徳島地域会史上最初の事業となるこの「建築家が考える木造建築—非住宅編—」、富田さん設計の「監工房のある家」の階段で締めたいと思います。

徳島の木造建築の未来をみんなで紡いでいきましょう。



日本建築家協会(JIA)は社会と共に生きる建築家集団です。

林野庁補助事業
過剰木材在庫利用緊急対策事業